

頗る興味のあるものであつたが、話が長過ぎて會衆を倦怠させることが屢々あつた。菓子はいつも話の終らない以前に平げられ、残りの時間は一同溢茶をすすつて我慢してゐなければならなかつたが、十二時半の食事の鐘が鳴ると共に祝禱が唱へられ、一同四時間の勤行から解き放たれてあたふたと食堂へ駆け込んだ。

我等のクラスとの聯合の夜の聖書研究會は重苦しいもので、ミッシヨナリーモンク、長老、鰐寅なごの連中が、二年生には齒も立たぬ基督教辨證論や證據論などを述べ立てるので、會衆の多くは一刻も早く會が終るのを待ち望んでゐたと云ふやうな有様であつた。時移つて漸く絆キツナを解かれた二年生一同は、ヤレ／＼と足腰をのばして更に自分達だけの夜の禮拜を行ひ、「今日も送りぬ主につかへて」と感謝の讚美を唱へつつ一週間中の最も愉快な日の幕を閉づるのをその常としてゐた。

右の外毎週水曜日夜九時半から二年生だけの祈禱會が催された。この會では話はせずに一同が祈ることにしてゐるが、會を閉づるまで一時間以上も固い床の上に跪いてゐるのは容易な業ではなかつた。

二年生の基督教徒一同が熱心に信仰の道を歩んでゐるうちに、明治十一年は終りに近づいて遂に十二月がやつて來た。そして一同が敬愛するハリス牧師が再びその姿を札幌の町に現はして所屬するメソヂスト教會のために傳道を試みたので、彼を信する一同は信仰箇條の如何を顧慮することなく、進

んでハリス師の教會に加入した。

やがてクリスマスが來た。二年生は相集つて楽しく祝賀の饗宴うたげを催したが、クリスマスの祝祭は異教徒の仕事を真似たものであつて、眞面目なクリスチャンのなすべきことではないと云はれたクラーク先生の言を堅く守つてゐた三年生はこれに加はらなかつた。

愚弄された市郷舎監

十二月廿九日。この日は明治十一年の最後の安息日であつた。夕食を終ると共に一堂に會した兩級の基督教徒は、將に終らんとする一年の間に爲した凡ての失策と過誤とを検討し、更にまた來らんとする新たな年に處する計畫を頗る眞面目に考へつつあつた。この夜會衆の口について出づる祈禱と獎勵の言葉とは眞剣味を帯びてゐた。その神聖な會合の席上へ、いづくよりともなく、「市郷いちごうが歸つて來たぞ！」と云ふ叫びが鳴り響いて來た。

この市郷と云ふ男は豫科の數學の教師で同時にまた舎監であつたが、學力が足りなかつた上に奇妙な性癖の持主であつたので、學生一同から馬鹿にされ通してあつた。彼は最初東京英語學校の教師で

あつたが、その頃からその低能振りが生徒の間に喧傳せられ、彼が教壇に立つと小さい初年級の生徒までがガヤガヤと騒ぎ立てる。その様を見て逆上した市郷が、「このカラスはやかましくていかん。」と怒鳴りつけたのを聞いて、「クラスのことをカラスとぬかしたぞ。」と云つて生徒がやんやとはやしたてた。爾來「カラスの市郷」でその名が通つて來た。その男をさう見誤つたか札幌農學校へ採用したのであつた。固より東京英語學校にあつて彼の人となりを知りて一期生、二期生のしたたか者が、さうして彼の舎監振りに屈從しようぞ。消燈後夜な夜な提灯を手にして寄宿舎各室の人員調べにやつて來るのを知つてゐるいたづら者共が、二階の梯子段の上へバケツや金盃を並べ、彼が階段を二三段階んだ途端に、舎監の頭上へグワラ／＼とまろび落ちるやうに仕掛けて置く。狸寝入りをしてゐる生徒達が、階段をまろび落つる金盃の音に和して暗に響く市郷の悲鳴を耳にしてワツとばかりに歡聲を擧げる。

或夜のことおつかなびつくり階段を上つて來た市郷が、私共の居室へ點檢にやつて來て提灯で内田の顔をてらして見た。眠つたふりをしてゐた内田が、やにはに大聲を發して「市郷の馬鹿野郎！」とわめき立てた。そして悪口雜言の限りをつくして寢入つてしまつた。怒髮冠をついた彼市郷は、その翌朝内田を舎監室に呼びよせてその不都合を詰責したが、

「多分寢言を云つてゐるところへ點檢に見えたので御座いませう。私は一向に知らないことで……」

と内田はスルリと逃げて舌を出した。

「不都合千萬だ。左様な圖太いことを申すなら證人に同室の大島を呼び出すぞ。」

と頭から煙を出した市郷がすぐさま謹嚴に見えた私を呼び寄せた。

「内田は好人物でありますが、さうも大がかりな寢言を申しますので毎度私も悩まされます。昨晚のも確に例の寢言で……」

と證言を求められた私も、亦手際よく肩すかしを喰らはせた。とりつく島のない市郷は美事に敗軍したが、そのうちにランプ事件と云ふのが起つて低能兒市郷は衆の怨府となりおほせた。

その頃石油ランプがもとで各所に火事騒ぎが起つたので、危険を感じた黒田長官が、農學校寄宿舎に於ては爾今石油の代りに種油を使用すべしとの布告を發し、石油ランプを沒收して植物油を燃やすべき特別製の洋燈を支給した。光力が著しく減じた上に不潔極まる種油の使用を強制された生徒一同は不平でたまらなかつた。そこで智者が一策を案じて漢籍中の最大な文字の寸法を測り、その中に最小の英字が幾つはいるかをパウロ太田に數へさせた。

頑迷な長官に迎合して生徒を壓迫する市郷舎監が、「昔は行燈の光で勉強をしたものだ。生徒共何をほざくか。」と豪語してゐるのを耳にした生徒代表が、漢字と英字との比較の結果を手にして早速舎監室に押しかけ、行燈で讀める文字はこれ、我々が今日讀まねばならぬ文字はこれと、漢字一字の

中にはいる英字の数を指示して文明逆行の不都合を詰問した。ところが執拗な市郷は頑として生徒の要求に應ぜず、近く種油と石油とが同じ光力を發することを科學的に證明して見せるから驚くな、と豪語して生徒に挑戦した。

歳末祈禱會の催されてゐる眞只中へ市郷舎監は酔歩蹣跚熟柿臭い息を吹きながらやつて來た。かねがね憎悪と鬱憤とが積りつもつてゐた生徒達は、彼に對して一統の意思表示をするのはこの時だとかかり、集會半ばの二年三年の基督教徒も將又異教徒も團を排して突進した。そしてじたばたする彼を戸外に引きずり出し、降り積る雪の中へ叩き込んで、雪つぶてをいやと云ふほご投げつけた。

その際チャールスは最も宗教的であつたと見えて、このやうな非基督教的行爲は中止せよ、と勸告した。然し一切の仲裁は無効であつた。そして聖書を床へ投げつけて現場へ駆けつけた内田・田内・黒岩等の三年生の面々は思ふ存分市郷をこづき廻はし、凱歌を高くあげて元の集會所に引き返した。祈禱感話の會は引續き行はれたが、今しがた敢行された蠻的行爲に對する懺悔の祈禱を口にする者も現はれた。最初は嚴肅であつたこの夜の集會半ばにしてキリストは姿を消し給うたと會衆の凡てが直感した。そして一同はデキール博士とハイドの如き兩面を有する洗練されない基督教徒であつたことを自覺して興ざめ顔に集りを解散した。

珍らしい祈禱會

堅い床の上に長時間跪座して祈りを續けてゐると、遂には膝關節炎を起す可能性があること云ふことを、生理學の教師から傳へ聞いた二年生の信徒達は大いに危懼の念を抱き、何とかして祈禱會の時間を短縮するよしもがなと額を集めて協議した。その結果同じ事柄を同じ集りで繰り返して述べることを禁止しようと思ふことになつたので、ために祈禱會の時間が廿分ほご短縮されるやうになり、一同やれやれと膝頭を撫でました。

野山を包んだ白雪もとけそめて、なつかしい縁が眼を樂しましめるやうになつた三月半ばの水曜日であつた、この日は恒例の祈禱會を催すべき日であつたが、二年生一同は三時間連續の劇しい農場實習に疲れはてゐるところへ、夕食を鱈腹胃の腑へつめ込み、更に又既定の時間通り學課の豫習をやつたので、身心共に困憊して靈明的集會を行ふには最も都合の悪い状態になつてゐた。然し規則は曲ぐべからずであつた。故に當夜の司會者たるフレデリック高木が鐘を鳴らして六足の仔羊を己が室に呼び集め、例のメリケン粉樽の講壇の傍に跪き、樽の上に兩腕を組んでその中に頭を埋め、短い祈禱

を試みて集りを開始した。出来るだけ早くこの會が閉ざされることを待ち望んでゐた會衆一同が、司會者に引續きスピードを出して祈りを試みた。そしてその最後の者がアーメンと唱へた時には、ヤレヤレこれで解放されたかと思つて一同胸を撫でおろした。彼等は司會者の閉會を宣する祝禱が今ささやかれるか今ささやかれるかと痛む膝頭を撫で廻はしながら首を垂れてゐたが、さうしたことか、フレデリックは無言の行を續けたまま不動の姿勢をとつてゐる。完全な沈黙が五分餘りも續いたが一向に祝禱を行ふけはひが見えない。講壇の一番近くにあるヨナタン内村が、たまりかねて細目を開き、そつと司會者の様子を窺つて見たら、何とフレデリックは、メリケン粉樽の上に両手を組み、閉會を宣した祈禱の姿勢のままに熟睡してゐたではないか。いくら待つても祝禱の聲が出ないのは當然である。これでは夜が明けるまで待つても會衆一同は解放されないであらう。かく考へたヨナタンは此際臨機應變の處置を神は嘉し給ふであらうと心に問ひ心に答へて突如として起ち上つた。そして嚴肅な聲を張り上げ、

「我等兄弟よ、フレデリックは熟睡してゐるが故に神は牧師の職を代行することを予に許し給ふであらう。我等の主イエス・キリストの恩、^{めぐみ}聖なる神の愛、我等會衆の一同の上にあらんことを。アーメン。」

と祝禱を試みた。待ちあぐんでゐた仔羊共がアーメンと和していそぐと起ち上つたが、樽の上に載せられてあつたフレデリックの頭はそれでも動かなかつた。笑を含んだチャールズが彼を揺り起した。ハッとばかりに眼を醒ましたフレデリックは牧師の職責を忘れてゐなかつたとみえてすぐさま祝禱を始めようとした。會衆一同はドヤ／＼と退場しかけてゐた。講壇の上に眠りこけたフレデリックは確に不覺であつた。然し聖なる使徒達すら主の祈り給うた際に眠を貪つたと聖書に記されてある。況や勞働に疲れて而も腹の皮が張つてゐる若い信徒に於てをや、と一同は當夜の司會者に慰めの言葉を投げかけた。

風雲を孕んだ或日の禮拜

大がかりな探險旅行は、經費が莫大にかかつたので、その後はそのやうな計畫は遂行されず、暑中休暇には歸省するなり、札幌に留るなり、學生をして自由行動をとらしむることとした。

明治十二年の夏を帝都の樂しきホームで過したヨナタン内村とフランシス官部とが、八月廿五日再び札幌の地を踏んだのを迎へた信仰の友達の歡喜は譬ふるにもが無かつた。粗末な卓子の上には心をこめた茶菓を用意して一同は兩人が語る都のニュースに聞きほれたが、ウランシスとヨナタンとが

打ち連れてメソヂストの邦人牧師を訪問して晝食を振舞はれた際の失敗談には、一同腹をかかへて笑ひこけた。

「箸を取上げていきなり食物を口に運ぼうとしたら、同じ座にあつた長老教會信者のYと云ふ青年が、あなた方は食前に感謝の祈禱をしないのですか、さあ祈りませう、と云つたのだよ。それまで基督教徒の習慣を知らなかつた俺達は、其時は實際穴にも入りたい心持であつた。やがて感謝が唱へられ、さあ戴きませうと云はれて、ヂッと目を伏せて眺めたそのお菜の一つ一つが今でも目先きちらつてゐるよ。煮つけであつた魚は確に舌平目であつた。その背面には黒い五本の縞があり、口は胸鰭の少し下の方で鈎なりに曲つてゐた。その時の恥しさは今でも忘れないが、實際感謝なき食事は墮落の徴だよ。」

と兩人が語り出すのを聞いて、エチケットを知らぬ野育ちのクリスチャン達はさう云ふものかナールと眼をつぶらにして驚いた。

メリケン粉樽を講壇とする小さき教會は依然として堅實な歩みを進めて行つたが、餘りにも禮拜が單調であるから、一つ新しい試みをしてはと提案する者が現はれた。その云ひ分によると自分達が世の中へ出れば必ず不信者にめぐり遇ふに相違ない。そして様々な論難攻撃を受くるに違ひないから、今から應戰の準備をして置くに若くはない。そこで日曜の禮拜に連なる會衆を二組に分ち、一方はク

リスチャン、他方は不信者となし、最善を盡して攻防戦を試みよう、と。

一同はこの妙案に賛意を表し、新方法が行はれる最初の安息日に、籤で會衆を二組に分けた。その結果チャールス廣井・ヨナタン内村・フレデリック高木・エドウキン足立は信徒側に、フランシス宮部・ヒュー藤田・パウロ太田・カハウ佐久間は不信者側に廻ることとなつた。

祈禱後菓子^の分配が例の如くすむと、『神の存在』と云ふ題を掲げて論戦の火蓋が切つて落された。不信者側の先鋒を承はつたフランシスは、宇宙は今日までそれ自身で存在し得たのであつた。神の御業で造られたのではないと云つてチャールスに挑戦した。ところがチャールスはすべて物質には何ものかによつて作られたる特徴があるから宇宙は自存的であり得ないと答へて巧に攻撃を撃退した。實際家のヒューには基督教を猛撃すべき種が無かつたので、第二陣としてパウロが飛び出し、フレデリックを相手にして攻撃の鋭鋒を向けることとなつた。學者的でしかも常々多大な懷疑を胸に抱いてゐるパウロが如何なる難問を發するか、それに對して生眞面目なフレデリックが如何に答へるか、風雲如何にも急なものを感知して會衆一同は固唾をのんだが、パウロは「僕の認むるところによれば」と切り出して來た。「この宇宙は確に創造せられた宇宙である。神は全智にして全能である。神には爲し能はないことはない。併しこの神は宇宙を創造し賦與せる潜勢力を以て獨り生長發達し得るやうに宇宙に運動を與へた後に、創造者なる神が自己の存在を斷ち、自分自身を減ぼしてしまはな

つたことを君は如何にして僕に證明することが出来るか。若し彼が凡ての事を爲し得るならば、宇宙を創造してしまつた後に何故自殺することを敢てしないのであるか。」と極めて冷かにそしてアイロニカルな口調でつめよつて來た。複雑なしかも冒瀆的な質問、それに對して實際的なフレデリックは如何に答へるであらうかと不信者側さへ懸念したが、困惑した彼は唇を噛んで沈黙した。それと見て勝ちほこつたパウロは毒舌をふるつて追撃戦を試み、フレデリックが何とか言はねばならぬやうに仕向けたので、たまりかねたフレデリックは「馬鹿でなければそんな質問をしない。」と應酬した。

「何、馬鹿だと。では君は僕を馬鹿と云ふのだナ。」

「如何にもその通り。愚問を發する君に對しては然かく言はざるを得ないではないか。」

決然たるフレデリックの答を聞いてパウロは怒心頭に發したのであらう、胸を叩きながら「諸君！」と云つて立ち上つた。そして「僕はこれ以上この仲間と同席することは出来ない。」と云ひ放ち、荒しく扉を排して室外に飛び出した。自分の室に達するまで嘯鳴り續けてゐたパウロの聲が手に取るやうに聞えて來た。思はざる事態を目撃した會衆一同は非常に狼狽した。そして討議の續行を中止してこの日の禮拜を閉ぢ、如何にして兩人を和解せしむべきかに就て相談した。

新計畫は神の御心に適はぬからと云ふことで斷然廢止された。そして次の日曜日には再び古き方法で禮拜が行はれたが、互に噛み合つた獅子も牡牛も争鬪的精神を水に流し、メリケン粉樽の前に跪いて睦じく祈を捧げてゐた。

決然渡道したジョンK伊藤の一家

話が少し前後するが、此處にまたジョンK伊藤の父平野彌十郎翁とその一家とが登場して我等と密接な關係を持つやうになるから、明治八年四月十九日開拓中主典の職をさらりと投げ出してから以後の彌十郎翁の動靜を手短に物語つて見よう。

開拓使を辭した平野彌十郎は、時勢を見るに敏な人であつたので、當時漸く芽をふき出した新聞事業が將來發展の可能性あることを看破し、或る知人を介して日就社讀賣新聞の賣捌店を引き受けることを決意した。

その頃日就社は虎の門のほとりにあつたが、親しく社長や編輯長と面談して新聞賣捌の方法等を示教して貰つた末に、赤羽の川を境に芝金杉以南六郷川に至る區域を彌十郎の受持と定めて一手販賣をなすことに取りきめた。

そこで芝田町八丁目に間口三間奥行四間の建家があつたのを買ひとり、店の體裁を直し、諸雜作の

手入れをして開店の準備を整へた。新聞配達人は毎月の給料を金三圓と定めた上に新聞配達高に依つて別に歩合金を給する制度とし、洋服を給し、黒塗りの箱に鈴を附して肩に付け、威勢よくリン／＼と音を立てて配達に廻らせることにしたが、恐らくはこれが今日號外賣りの鈴を打ち振り打ち振り飛び歩くやうになつた濫觴であらう。店名を芳文堂と名づけて開業したのは五月十五日であつたが、その際本社から配給を受けた新聞は僅に百貳拾枚であつた。その後年を経るに従つて賣行き次第に増大し、三四年のちには一日の賣高貳千七八百枚を算するやうになつた。

ところが其の間、明治九年五月のこと、賣捌店として優秀な成績を挙げつつある芳文堂主平野彌十郎に對し、日就社長より大阪へ出張所を開設する件を引受けて呉れぬかとの懇談があつた。と云ふのは讀賣新聞は追々諸縣へ擴まり、社務漸く盛大になつては來たが、三府の一つであるにも拘らず大阪のみは足がかりが無くて新聞の賣行きが思はしくなかつたからであつた。この際先づ大阪に地盤を築き、延いては又神戸西京まで勢力を伸ばさねばと社の幹部が考へてゐた。處で日就社々中にはかかる大事を託すべき人物がなかつたので、斯く白羽の矢が彌十郎に向けられた譯であつた。企業心が旺盛な彌十郎はその申し出を快諾した。そして芳文堂の營業は甥の飯田利兵衛と云ふ者に一任し、日就社より大阪支店設立の入費金貳百圓と己が月給として外に五拾圓を受取り、買ひ整へた配達箱・鈴その他の物品を船積みで大阪に廻送しておいて、五月十六日に東京を立ち東海道を陸行した。海路を選

ばなかつたのは急を要するからであつた。先づ新橋より神奈川までを汽車に乗り、それより小田原まで人力車を馳せて同地に一泊、翌日駕籠で箱根を越え、以後伏見まで人力車に乗り通し、それより夜船で大阪に着いた。それは發足後十日目の五月廿六日の朝であつた。知人の世話で伏見町五丁目店舗を借りて新聞店を開くこととし、大工を雇ひ入れて表掛りを西洋造りに直し、屋根の上に讀賣新聞と云ふ大文字をペンキで認めた大看板を掲げ、配達人四名帳付け一名を雇ひ、六月十八日に華々しく開店した。この頃大阪には東京新聞と云ふものが一向に行はれず、心齋橋筋に報知新聞の出店が唯一軒あつて細々と營業を續けてゐたやうな状態であつたので、彌十郎方の配達人が揃ひの洋服に黒塗りの箱を下げ、鈴の音をけたたましく鳴らして大阪市中を賣り歩くその姿が珍らしいとて人目を惹き、家々より老若争ひ出でて新聞を買ひ求めると云ふ景況であつた。商賣上手の彌十郎は開店に先だち、市中へ引ふだ(廣告ビラ)四千枚あまりを配つて置いたので、早くも人氣が沸騰してゐたのであらう、この日午後一時には賣切れとなり、月極めの申込みも殺到する有様で、思ひもかけぬ上々吉の首尾であつた。

その後知るべの者を見立てて神戸多門通りに日弘堂と云ふ新聞賣捌所を設立させて羽翼を伸したが、景氣のすばらしいのを見て西京にも引受人を生じ、大阪より神戸と西京とに廻附する紙數も日に増し増加するやうになつた。關西進出の景況はこの通りで、開店後日もまだ淺い七月頃に、本社へ直

送する新聞の賣上金が月百五拾圓にも上ると云ふすばらしい有様になつた。

然るに七月十四日のこと、東京の知人から彌十郎儀神奈川縣廳租稅課土木掛へ採用のことに定まつたから即刻歸京すべき旨電報で知らせて來た。これは大阪へ下向に先だち、さる有力者が神奈川縣令野村靖氏に彌十郎の身の上を話して置いたためであるから、大阪の事業が調子づいて來たからと云つて、それを斷るわけにはゆかなかつた。事情その通りであつたから、餘儀なく店と事業とを他人に譲り、七月十八日に見はてぬ夢の感を抱いて彌十郎は阪地を發足した。梅田停車場で見送りの人々に別れ、神戸より乗船して廿日横濱着、早速神奈川縣廳へ出頭したところ、租稅課勤務十二等出仕月給貳拾五圓の辭令を下附された。そして廿八日附で更に道路橋梁專務兼上水掛り申付候事と云ふ辭令を受け、平野彌十郎は再び本職に復して専門の土木事業にたづさはることとなつた。

明治十年六月、彌十郎が神奈川縣廳に於て執務中、札幌農學校で勉強中の俣伊藤一隆が突如として姿を現はした。應接室で不意に愛兒にめぐり逢つた彌十郎はいたく驚いたが、同窓の者たちが敢行する蝦夷地の探險に加らず暑中休暇を利用して歸省したのであると聞いて安堵の胸を撫で下ろしたのであつた。信仰に燃ゆる一隆は、芝田町の家にたざりつくや否や家族一同を集めて熱心に基督教の講義を試みた。始めて教を聞いた父母弟妹の胸に、かくして根を下した一粒の種、馬腹に長鞭をあてて木の間に姿をかき消したクラーク先生の傳道的精神が、大志を抱けと呼びかけたその愛弟子の口を通し

て平野一家をうるほすこととなつたのは奇しき縁であつたと云はねばならぬ。

さて芝田町の芳文堂は、彌十郎が神奈川縣廳へ奉職中も華々しく營業を續けてゐたが、店を預けて置いた甥の飯田利兵衛が、その後屢々不埒を働き、毎月の潤益金を使ひ込んで放蕩に身を持ちくづし始めたので、新聞賣捌業を手堅く持續するには、官途を辭して彌十郎自ら采配を振る必要を生じて來た。致し方なく彌十郎は辭表を差し出し、留まれと勸説する多くの人々の懇情にそむいて芝田町の家に引上げた。彌十郎が、芳文堂の帳簿取調べ中、利兵衛は店に有合せの金九圓餘りを懐にしていくともなく逐電した。

さて彌十郎自ら采配を振るやうになつてからの芳文堂は營業日に増し好調となり、一日の新聞賣上げ高千六百五拾枚内外、七名の配達人に丁稚一名を擁して尙人手を要するやうな状態になつた。且つ又この年は春まだきから西南戦争が突發したので、新聞紙の營業は上々吉であつた。

明治十一年五月十四日、大久保利通公が紀尾伊坂に於て島田一郎等六名の兇徒のために殺害されたので、諸新聞社は別配達でその事を讀者に報道した。これが後世の號外の濫觴であつたらう。翌日の新聞は俄然賣高を増加した。

八月廿四日竹橋内の近衛兵が叛亂を起した際にも新聞の賣高が著しく増加した。これ迄芳文堂の地盤は芝金杉橋以南であつたのを、八月一日より本社直營の區域を譲り受けて新橋以南に改めたため、

新聞配達高一日二千七百枚に上り、業務は益々隆盛を極めるやうになつた。

さて芳文堂の業務も次第に緒についてめでたく春が廻つて來た明治十二年のこと、札幌在住既に三年餘りにして早くも農學校の三年生となつた悻の伊藤一隆から、自らは骨を北地に埋めて蝦夷地開發のために一生を捧ぐる所存であるから、相願くは家族一同意を決して北海道に移住せよと願る熱心に申越した。

彌十郎つら／＼惟んみるに、己が業とする讀賣新聞賣捌は、開店の當初より他の賣捌所と趣を異にし、種々の手段を講じて顧客の歡心を買ひ、非常に勉強努力を致したが故に固い地盤を開拓することが出來たのであつて、ために業務日に繁榮を來たし、一ヶ月の潤益七十餘圓にも上るやうになつたので、このままで押し進めば日々の生活は極めて安泰であるのは云ふまでもない。然し讀賣新聞を發行する日就社は萬代不朽のものでない上に、新聞の顧客が何時激減せんと測られず、また社それ自身が經濟的暗礁に乗り上げて何時覆没せんとも測り難いのである。不幸そのやうな場合に遭遇せんか、如何に丹精をこめたとしても、人頼みの商賣であるから、我も共々その飛沫をあびねばならぬこととなる。それを思へば業盛んなる時に身を轉ずるのが上乘の策である。依つて此際花が咲き出した芳文堂の事業一切を相當の價を以て他に引継ぎ、その金を旅費並びに渡道後に營むべき新事業の資金に充當して新天地に活躍するのも男子の本懐である。心中斯く決したので、果斷な彌十郎は早速芳文堂を

他に讓ることにとりきめた。そして家屋を二百圓、芳文堂の株を八百圓、併せて千圓で望の者に賣り渡し、早速北海道移住の仕度にとりかかつた。

この頃「北海道へ移住を志す者はその目的を書面に認めて開拓使へ願ひ出づれば船賃無代たるべし」との布告が出たので、彌十郎は早速開拓使出張所へ出頭し及んだところ、かねて關係の深い人物であつたので、家族一同の送籍證へすぐさま檢印して下げ與へられ、皆々無賃で渡道する許可を與へられた。

さて御用船立武丸は五月五日品川出帆豫定だつたので、舊友知己へ暇乞ひに廻り、同日午前十時一同は人力車で居宅を出發した。彌十郎と同行して父祖以來住み馴れた都をあとにしたのは彌十郎妻とみ、養母幸、妻の母藤林ます女、並びに一男二女併せて六名であつた。品川の海は遠淺であつたので、遙か沖合に碇泊してゐる本船まで、波にゆられゆられて舳舟で行かなければならなかつた。岸邊に立つて別れを惜しむ親戚故舊の姿が次第次第にうすれ行くのを見まもる一同の眼には、覺えず涙の露が宿り、哀愁の念實に深かつたが、立武丸に於てはかねて顔なじみの平野彌十郎のこととて、上等士官室を一同の爲に明け渡し、賄方よりは手厚い食物を送りこして至れり盡せりの待遇を與へてくれた。

此日午後六時品川を抜錨して翌六日未明に鹿島灘を乗り越す頃までは、天氣晴朗で波も至つて平穩

であつたが、追々空模様が悪しくなり、風雨頻りに到つてすさまじい荒天となつた。ために波は本船の上甲板を打ち越し、危ふきこと一再ならずと云ふ有様であつた。尻屋崎を過ぐる頃から波は稍々静まつた。この間乗客一同の難澁一方ならず、八日午後一時辛うじて函館へ入港したので初めて蘇生の思ひをした。

彌十郎一家の者はすぐさま上陸して知人の家で休養し、十日朝再び立武丸に乗船して小樽へと出帆した。この航海は極めて平穩で十一日午後二時無事小樽へ着船したが、かねて報を得てゐた伊藤一隆は、喜色満面小樽まで出迎へにやつて來た。そして森屋榮作方に宿をとつて置いてくれたので、一同は上陸して森屋へ一泊した。翌十二日陸路札幌に向ふ豫定のところ、小樽―錢函間が鐵道工事中で山崩れ多く、人馬共に通行不能の由であつたので俄に豫定を變じて、十三日小樽より錢函に向ふ小蒸汽に便乗して、一行は直接錢函に向ひ、伊藤は陸路を先發錢函に一泊して人力車の手配をすることとした。

かくして平野一家の者共が錢函に到着したのは十三日の正午であつたが、それより男子は乗馬、女子は人力車で札幌に向ひ、同日午後四時恙なく同地着、一先づ濱益通りに居住してゐた親戚中村邦佐方に落ちついて後圖をはかることとした。とかうする間に大荷物が續々到着したので、渡島通り北側に間口四間半奥行八間の家を借りて中村方より轉居し、店住宅共に雜作して書籍・賣藥・砂糖・玉子・石油等の商業を始め、六月一日から本格的に開店して北海道での商業戦線に躍り出た。然し開拓

使は彌十郎の着札を聞いて棄てては置かなかつた。そして早速工業局雇を申し附けて得意の道路橋梁等の仕事に従事することを委託した。

その後豊平村より千歳驛までの道路並に土橋等の修繕を申付けられたのを手始めに、眞駒内、石山間道路の改良、小樽驛遞所前より手宮迄の車道開鑿等、彌十郎の手を煩はした土木工事は多々存したが、小樽出張中、

平野 彌 十 郎

雇 申 付 候 事

工業局土木課兼營繕課勤務申付候事

明治十二年十一月廿八日

開 拓 使

と云ふ辭令が下りて彌十郎は開拓使の本雇を命ぜられた。

斯くしてジョンK伊藤のホームが札幌に根を下すことになつた。家庭愛に飢ゑてゐた若人達が、「小父さん、小父さん」と彌十郎を慕うて平野家に入りびたりの態となつたのは、自然の勢であつたと云はねばならぬ。

上級生の六人組

春過ぎ夏たけて明治十一年の秋がまためぐつて来た。第一期生は早くも最上級の四年級に進んで最後の學生生活に磨きをかけることとなつたが、最初轡を並べて初年級に入學した者の内、學力不足の者並びに病弱な者が落伍退學して、結局次の十四名がゴールに向つて突進することとなつた。

佐藤昌介 大島正健 荒川重秀 内田瀨 伊藤一隆 黒岩四方之進 小野兼基 田内拾六 佐藤勇
柳本通義 渡瀬寅次郎 出田晴太郎 山田義容 中島信之

二期生の中にクリスチャンの七人組があつたのとは一寸その意味が違ふが、この十四名の中で信仰を共にしてはゐるものの、同氣相求むる者と然らざる者とが混在し、最も親密な伊藤・大島・黒岩・内田・柳本・田内の六名が所謂六人組を結成してクラスの牛耳をとり、最年長の佐藤を長老とあがめて乗合船を進めるやうになつてゐた。

その一人でしかも東京英語學校以來の同窓であり、札幌在學中の四年間は私と同室で生活した内田瀨のポケットに秘められてゐた珍らしい備忘録が残つてゐる。その中からめぼしい記事を拾ひ出して

解説を加へ、以て當時のなごやかなりし學生生活の實況を偲ぶよすがとして見よう。

明治十二年

九月一日(月) 正午十二時半雨降り雷鳴る。速に晴れ散歩す。暮方に至り煎餅を買ひ食ふ。

九月二日(火) 元氣よし。既に秋の氣あらはる。北風吹き寒氣を感ず。夕に至りて菓子を食べふ。

九月三日(水) 今夜煎餅を食ふ。夕方大島と校園にコインを取りに行く。

九月四日(木) 昨日校園より取り來りたるコインを今夕平野にて食ふ。

(大島註)。校園とは實習農場のことで、學生達はいたづら半分に屢々農作物の掠奪に出かけたものだ。札幌に居を構へたジョンK伊藤の實家平野彌十郎宅がそれ等の獲物を處理する上に如何に利用されたかは、この後の記事が明かにこれを物語る。

九月五日(金) 午後四時六名にて東京庵へ蕎麥を食ひに行き大食す。

九月七日(日) 今日借樂園へ狼を見に行く。四五日前白石村にて取りたるものなり。

(大島註)。借樂園と云ふのは今の北大農學部講堂の西南部鐵道線路の北方一町の處にあつた農學校職員俱樂部で、鮭鱒の卵を孵化させることすら容易であつたほどの清冽な水を湛へる小川をめぐらした幽邃な中の島めいた場處に建てられた木造平野建の家であつた。それは大正

の終り頃迄はのこつて居た。

この観せ物になつた狼と云ふのは、北海道に棲息してゐた狼の最後の一頭として今は北大附屬博物館に剥製となつてその姿を止めてゐる灰色の大きなヤマイヌのことであつたと記憶する。

九月八日(月) 今日伊藤の友人小笠原氏の農場に行き、葡萄を取り、而して西瓜を食ふ。それより歸りて平野に行きコーヒーを飲み、後に菓子を買ふ。但し饅頭なり。

本日アルミペンを買ひ之を六名にて分つ。

九月九日(火) マイクロスコープ作業の後、四時に田内と中島と小生ファームに行きてメロンを食ふ。ブルックス教授、宮崎其他の人に見つけらる。

九月十一日(木) 午後四時より借樂園へ行き様々なる博物標本を見物し、校園を廻りてメロンを食ひたれども熟れずしてうまくなし。故に又グリーンハウスへ行き、西瓜五つを食ひて歸る。夕飯を食ひ、平野へ行き、歸りに金とんを買ひ食ふ。

九月十六日(火) 今日校園へ葱を買ひに行く。然れども未だ熟せず。故に買ふことを得ず。それより創成町へ行き、家鴨一羽を壹圓にて買ひ平野に行く。

明日は例年は祭日なれども今年より變りて十月十七日となる。然れども事務より達しなきを以て、小生等明日出校せざることに定む。

九月十七日(水) 今朝休日改りたることを事務より達しなきを以て、早朝より小生等散歩す。豊平館の方より歸校せんとするに、歸らざるやう校園より合圖する者あり。依つて小生等走りて平野へ行き暫時休む。

今日はずまり休業になりたり。故に昨日買ひ置きたる家鴨を殺して平野にて食ふ。

九月廿六日(金) 今日少々雨降る。ピーボディ一十五分遅くなりしを以て一同逃げる。屯田兵ラッパ卒を雇ひて運動す。

(大島註)。ピーボディ教授は温情がなく遅刻を容赦なく缺席につける上に、學力も充分でなかつたので、生徒間の氣受が宜しくなかつた。この日本素嚴格な教師が遅刻をしたので、生徒は大喜び、その姿が校門に見えてゐたのに、そら逃げると教室の窓を開けて一同姿をくらましてしまった。教室のドアを開けて見てピーボディは苦笑してゐたが、今も昔も變らなものは、すきさへあれば授業をサボらうとする若い學生達の態度である。

九月廿八日(日) 午後より三年生等と豊平の森へ行き葡萄を取る。葡萄澤山ありたれども田内小刀を失ひ太田時計を落す。然し太田は後に拾ひに行きて見つける。今夜平野にてあんころ餅を食ふ。

十月三日(金) 今日大に寒し。何となれば手稻山に雪を見たればなり。

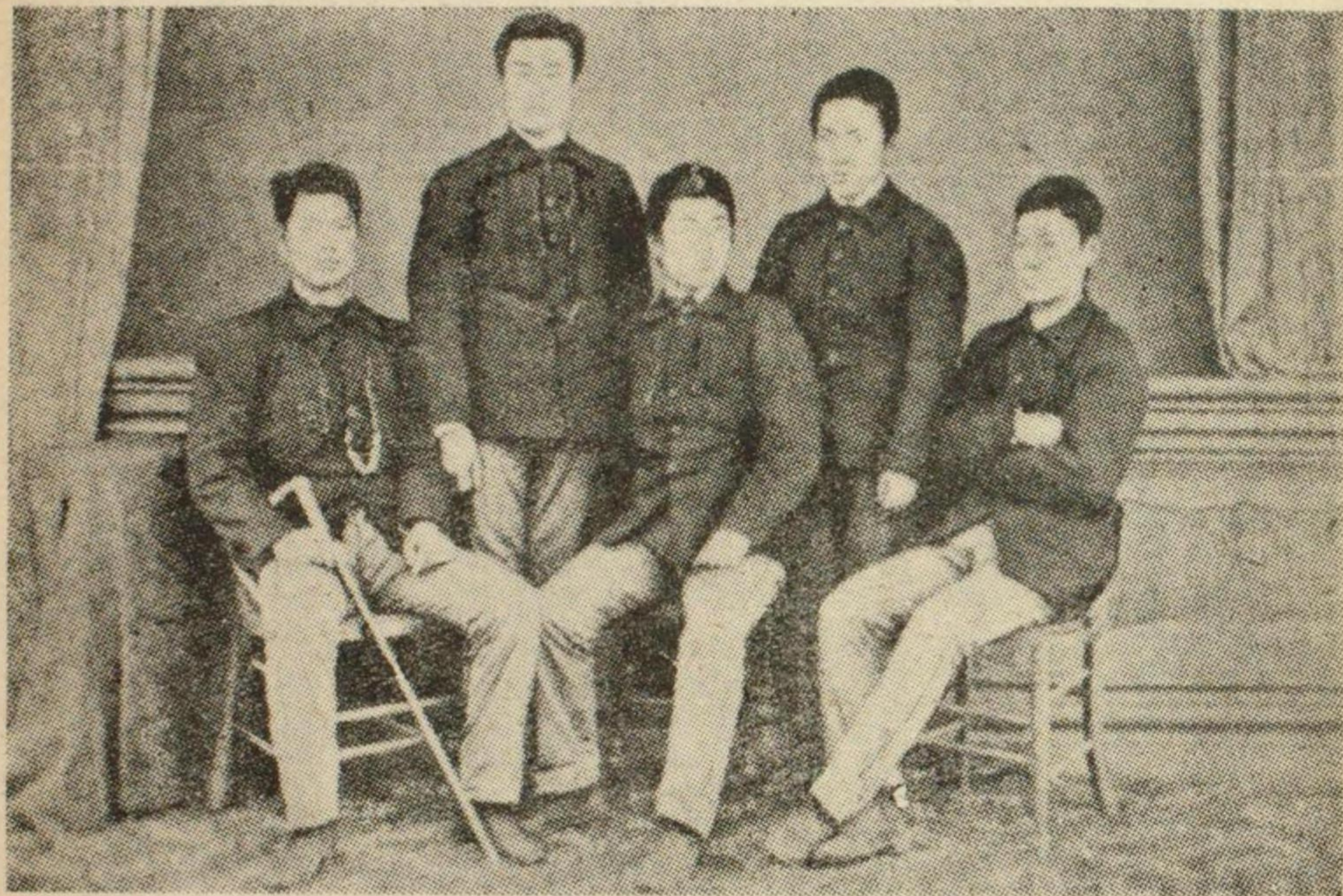
十月十日（金） 今朝午前七時頃雪降る。大いに寒し。本日よりストーブを教室につけ始む。
十月十一日（土） 今日も大いに寒し。本日我等の舎内へストーブをつけるため大いに騒がし。
十月十二日（日） 我等の午前の集會に於ては、此節は創世記の章を講ず。
十月十四日（火） 今日天氣よし。柳本と校圃及び借樂園へ散歩す。歸途めぐりあはせたる黒岩と三人にて犬一疋を撲殺して皮を剥ぎ、其夜平野にて葱及醬油を加へてその肉を煮、ジョンK伊藤をだまして食せしむ。

十一月三日（日） 天長節即ち休業、然し今日は雨模様。例年の如く祝砲ありたり。例年之は午前なれども本日雨のため午後より始まりたり。

今日午後より平野にて雑煮餅を食ふ。だしは買ひ求めたる鶏なり。金子は無かりたれども平野小父さんより壹圓貰ひ、之を以て買ひたり。

十一月十七日（月） 今日夜來の大雪融け道非常に悪し。明日午前十一時教頭ホキラー氏歸國につき、見送りのため休業。今日田内エレキトリシチーの實驗に銀一圓をつかみたり。

（大島註）。ピーボディ教授が水を盛りたる容器に一圓銀貨を沈め、その水に電流を通じたる後、首尾よく銀貨を掴み取りたる者には賞としてそれをやると宣言した。電流が微弱であつたと見えて、躍り出た田内が忽ち銀貨を掴み取り、ピーボディ教授を啞然たらしめた。



仲のよかつた六人組（左より）黒岩四方之進，柳本通義，田内捨六，大島正健，内田澗，但し伊藤一隆丈はこの撮影に缺席してゐる。

十一月十八日(火) 午前十時教頭ホキラー氏出發。生徒一同圓山まで見送る。道大に悪るし。

今日平野に行き、障子にガラスをはめ、ストーブをたく。

十二月廿二日(月) 今日農學及び地質學の試験。

十二月廿三日(火) 理學の試験。

十二月廿四日(水) 開化史及び簿記法の試験。

今夜は信者一同ノース・カレヂに集合。大いに面白き一夜を過せり。

十二月廿五日(木) キリスト降誕日につき信者集合す。

(附記) 小野琢磨氏報

小生の記憶にては十三年一月初旬クロフォード氏鐵道の材料購入のため一時歸米の途次、小樽森屋旅館に投宿し、丁度ホキラー氏も任期満了歸國のため同宿し、小生は當時熊磯隧道着手のため熊磯に止宿中森屋旅館に入り、ホキラー氏夫妻とクロフォード及び松本莊一郎氏列座の席にて告別せしことを覺ゆ。さすれば内田君の日記にある通りホキラー氏は十一月十八日一旦札幌を出發せしも便船延期か其他の都合によりて引返し年を越して更に小樽に來られしものか。(二二三頁參照)

降誕節の前後

明治十二年十二月廿四日。この日は學期試験の重荷から解き放たれたので、めでたきクリスマス・イーヴを基督信徒が一體になつて祝さうではないかとの議が熟し、其舉を賛した學校側でもノース・カレッジ即ち講堂を貸してくれたので、午後七時から開會された祝會はいとも盛大にまたいたく愉快にプログラムが進行した。周旋役のエドウィン足立とヨナタン内村とは晝間からその準備に忙殺されてゐた。會場は美しく裝飾せられ、型の如き宗教的儀式が執行された後に、愈々當夜の呼びものである學生達の餘興が開始された。

固唾をのんで壇上を見つめてゐる觀衆の前に突如として紅白の達磨が躍り出た、これは頓才があり、何事も器用なジョンK伊藤の手になつたもので、その形と云ひ相恰と云ひ實によく出来てゐた。そしてそれを眺めた觀衆一同は手も足もない普通の達磨が何を演ずるのかと思つて、その二つを凝視してゐたところが、アトラ不思議々々々、紅白の達磨の眼がギョロ／＼と動き出した。そして造りものと思つたものが、スツクと立ち上がり、兩手兩足をウンと突き出して一しきり踊りぬいた上に、ヨ

ナタンの行司で相撲をとつた。その滑稽さに觀る者すべて腹をかかへて笑ひこけたが、顔の四角いところから判定して紅達磨は上級生の柳本に違ひないと目星をつけられた。

さて達磨が引込むのと入れ違ひに現はれたのは、腰の廻り以外は何もかもまとはぬ赤裸々な野蠻人であつた。彼はその扮装で踊つて踊つて踊りぬいたが、それが誰あらう、學生中の長老として凡てを指導してゐた謹嚴な上級生佐藤であつたので、一同は横隔膜が破れさうになるまで笑ひこけた。然し後に至り、あれは少しひさすぎたと苦情を云ふ者が現はれた。

最後にこれもジョンK伊藤の考案になつたものと記憶するが、恐ろしい大男のケンタッキー・ジャイアントと云ふ奴が現はれ、手にしてゐた菓子袋を一同に配つて歩いた。これは恐ろしい顔をしてゐるヨナタンを、仲間の中でも丈の高いヒューと今一人誰であつたかが肩車に乗せ、様々な色合ひの毛布をスツポリかぶせて偉大な巨人に仕立てたものであつた。大男のヨナタンが餘り活躍するので、その體を支へてゐた二人がこらへ切れなくなつた。四本の足がガタ／＼とふるへてゐるのが觀衆の眼によく見えた。たまりかねて悲鳴を擧げた二人がたうとうヨナタンを投げ出してしまつたので巨人もたわいなく潰れてしまつた。一同はまた腹をかかへて笑つたが、當夜はクリスチャン達の珍藝百出、會する者の凡てが心からなる喜悅にみちて樂しき祝會の幕を閉ぢた。

明くれば十二月廿五日。御子イエス・キリストがあれまされた榮光のその日を迎ふることとなつ

た。すべての學課と作業とから解き放たれた主の僕達しもべは、午前十時半一堂に會して嚴肅なるクリスマス禮拜を執行した。この集りには茶も菓子もなかつた。ありしは祈禱と眞面目な話ばかりであつた。昨夜の裸形の蠻人が生れ變つたやうな謹嚴さで集りを司會した。そして上級生の私が牧師の位置に就てクリスマス祭の存在理由に就ての説話を試み、昨夜のやうな馬鹿騒ぎをするのがクリスマス祭の眞骨頭ではないと云ふことと、降誕の日に羊飼ひが現はれると云ふことは季節の喰ひ違ひがある、クラーク先生の云はれたやうに、クリスマスはヒーズン・オリヂンのもので、作爲的の禮儀であるから我等は之を歓迎すべきでないことと云ふやうなことを強調した。降り積む白雪に輝いたこの朝ほご一同が眞面目であつた時はなかつたが、一夜明けただけで、よくも斯く嚴肅な心になり得たものだつたと今から思つても不思議な感がある。

年末の行事が終つて除夜の鐘が鳴り響くと同時に、希望に輝く明治十三年の暮が切つて落された。朝まだき臥床を蹴つて飛び起きた六人組の一人が、「オイ廻禮に出かけようではないか。」と同志を叩き起した。闇に勢揃ひした六人が雪を蹴つて襲撃したのは、創成橋のほとりにあつた本陣即ち外人教師館であつた。先づ戰の血祭にとベンハロー教授の室の扉を「御めでたう、御めでたう。」と云つてノックしたが、思はぬ生徒の闖入に膽を潰した教授は、息を殺して室内にかがんだまま少しも音を立てなかつた。

これは不成功と六人は方向を轉じてホキーラー教授を襲撃した。「御めでたう。」と連呼しながら扉をノックすると、「カム・イン！」と答があつて鍵をガチャリとあける音がした。ソレツと一同がなだれ込むと、あわを喰つた教授が寢衣の上へズボンを引っかけ、奇妙な風態で手を差伸し、「これは客を受ける服装ではないが許してくれ、ハッピー・ニュー・イヤー・ボーイズ。」と云ひながら温顔に笑を湛へて一人々々に強い握手をした。その様を見て凱歌を擧げた一同は、更に又ブルックス教授の室を襲うたが、早くもそれと察した教授は手早く身なりを整へ、六人組が飛び込んで来るなり落ちつき拂つて年頭の賀詞を受けた。日本の年始は馬鹿に早くやつて来ると外人教師一同は舌をまいて驚いたさうであるが、それが悪戯だと判つたので、それから以後は決してかかる手には乗らなかつた。

本邦最初の農學士を目ざして

明治十三年 (内田瀨の日記のつづき)

一月廿二日(木)

本日より學業始まる。大分雪深くなる。平野にて壽司を御馳走になる。

二月十六日（月）

今日生徒一同身長體重等を醫師カトル氏より調べらる。

二月廿一日（土）

夜校圃の公金何者かに盗まる。

三月三日（日）

本日校圃に於て難産の牝牛あり。中食後生徒圃場に赴き、五六人の力にて仔牛を引出す。

三月五日（水）

本日六人にて月寒村まで地所を見物に行きたれども大いに失望す。

三月十三日（土）

天氣大いに暖なり。本日豊平まで開拓地所を見物に行きたれども、雨降り來り途中より引返して平野に行く。今日は伊藤の誕生日にて赤飯を喰ふ。

三月廿日（土）

本日は春季皇靈祭にて休業。米國クラーク先生に書狀を認む。昨夜雨降り雪殆ど融け去る。

三月廿二日（月）

今夜小生等校則を嚴守する者十名集會し、遊廓遊びをなす者の處置をなさんが爲に協議す。

（大島註）。札幌農學校開校以來既に四年の歳月を闕し、クラーク先生に私淑した者達が、はち切れる元氣にみちて活社會に躍りてようとする日も目前にさし迫つたその頃、思はざる不祥事件が突發した。第一期生の中に又第二期生の中に、假面をかぶつた思はざる惡の種が潜んでゐたのであつた。先日校圃の公金が紛失したのは水と油との如き關係にあつた不良生徒の一人

の仕業であり、上級下級相通じてそれ等の徒が足繁く遊里に出入してゐたことが暴露したのである。

惡戯はするが正義觀念の強い六人組其他の上級生が、この日は長老佐藤を取り圍んで肅學の方策を協議したのであつた。

四月三日（土）

今朝永井盜罪を自白す。

公金を盗み取つた者は下級生の永井某であつたことが明かになつた。

四月十日（土）

本日耕地買入れの相談整ひ、賣主も承知し、證文を小笠原へ託す。

（大島註）。六人組が頻りに土地を檢分しつつある模様が日記に現はれてゐるのは卒業後六人組は土地を共有開墾してそこに根城を構へ、長く共同生活を營んで友情を全うしようとの議が熱したからであるが、それには世故にたけた平野彌十郎翁をも仲間に入れて萬事の世話を依頼しようと思ふことになつたのである。六人組の一人伊藤一隆の實父であり、且つ又六人組に對しては非常な好意を寄せてゐた彌十郎翁のことであるから、異議なくその申出でを受入れて適當な土地を物色し始めたが、札幌の郊外山鼻村二百八十三番地の耕地七千百十九坪、貳間に貳間半の板庫一戸附屬せるものを、所有主中村市之助より貳百圓で買取り、次で山鼻村貳百八十一番地拾七坪の建屋付耕地七千八百八十坪を青柳宗吉なるものから三百四十圓で買ひ求め、こ

本邦最初の農學士を目ざして

の二ヶ所の地面を六人組と平野の息彌市との共同出資と云ふ形式で手に入れたることとした。買取る前後の周旋をしたのは小笠原と云ふ老人であつた。念のため當時出資者の間に次の契約書が取りかはされた。

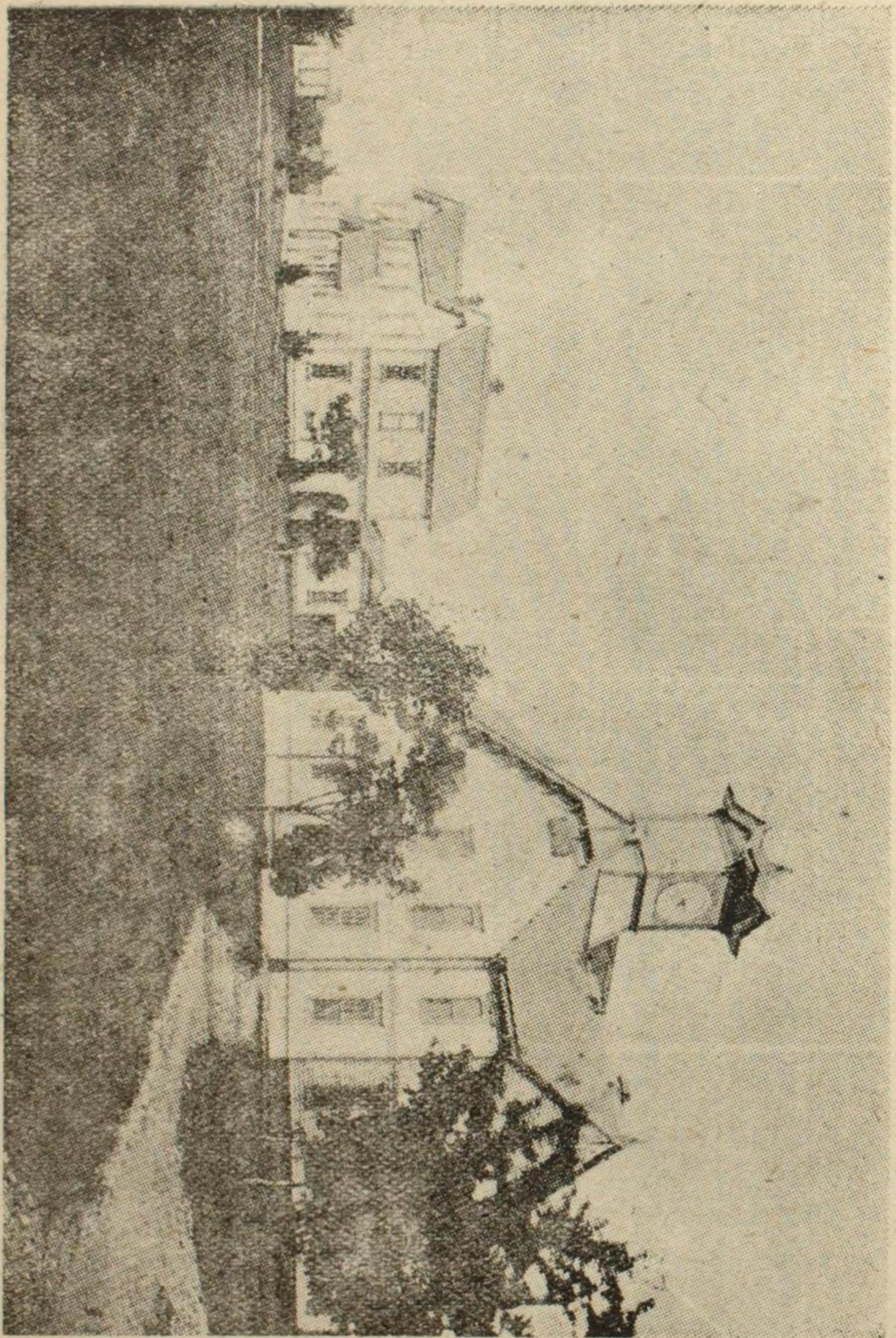
證

一金七百圓 協同金

右は協議之上農業資本金として各々金百圓宛支出致し前書金額積立候内より今度札幌郡山鼻村にて耕地二ヶ所にて壹萬四千九百九拾九坪建家共買取候に付尙追々農具買入及び住居家建築等着手致すべく候條各々承知の證連署如件

明治十三年四月十日

平野彌市印
 黒岩四方之進印
 大島正健印
 伊藤一隆印
 内田 瀨印
 田内捨六印



演武場（時計臺）及北講堂（明治22年）

この件と前後して平野家では、渡島通りの家を引拂ひ、商品も悉く他に譲つて商賣を取りやめ、渡島通り裏通り六十四番地の家作へ移轉した。

四月廿一日（水） 天氣大いによし。五名にて青柳及び中村より買ひ求めたる耕地を見物に行き、歸途平野へ立寄り、壽司の御馳走になる。

五月八日（土） 本日平野小母さん・伊藤妹千代・小笠原娘富・伊藤・田内・内田及び小生開拓使本廳跡へ摘菜に行く。

五月十二日（水） 昨夜午前二時頃勸業課へ盜賊押し入り、當直の官員一人を殺し一人を傷つく。本日六名にて我等の地所を測量す。

五月十四日（金） 今日山田兩伊藤外上級生二名併せて五名退校させらる。

（大島註）。これは光榮に輝く初代札幌農學校の歴史に一汚點を印した事件であつて、クラーク先生の感化も及ばない燕麥からすむぎが良き種に混つてすく／＼と育つて來たので、收穫かりいれが近づいたと見給うた天の父がそれ等を抜き集めて火に投げ入れられたのである。

遊里に出入した山田義容はあと二ヶ月で卒業の榮冠を擔ふ筈であつた。伊藤英太郎・伊藤鏗太郎其他放校處分に遇つた者共はすべて下級生であつたが、それ等は山田と行動を共にした薄志

弱行の徒であつた。

さきに公金を盗みとつた永井某を初めとして、正義派の鎗玉にあがつた不良分子は斯くして校内から一掃せられ、クラーク先生直系の勇士達が轡を並べて勇ましくゴールへ突入する日を數ふるやうになつたのはめでたききはみであつた。

五月廿四日(月)

今日デニング氏及びバチェラー氏傳道のため札幌着。

(大島註)。クラーク先生の着札當時札幌に來つて傳道に従事してゐた英國人宣教師デニング氏は、根據地であつた函館に引き上げたまま札幌へは姿を現はさなかつたが、この頃妻女と二人の子供を引連れて小樽に來り、更に轉じて曾遊の地札幌へ來つた上、角サ星の別宅を旅宿として札幌傳道に着手したのであつた。同行したバチェラー氏はアイヌの父として後に世の尊敬を集めたるジョン・バチェラー博士であることは云ふまでもない。

五月卅日(月)

今日は日曜日、デニング氏舊女學校に寓する者の宅に於て説教す。學校生徒信者十七名及びブルックス・ペンハロー・ピーボデー・バチェラーの諸氏並びにデニング氏の家族出席す。デニング氏は聖書の黙云なることを説教す。

(大島註)。この日の状況をヨナタン内村は、己が著書に次の如く書き記してゐる。

「六月は宗教的に多忙な月であつた。我々は新生第二年記念日を例年の如き歡喜を以て祝賀し

た。雪は融け好天氣が始つて我々は引續き三人の宣教師——英國人一人(デヴィソン氏)、英國人二人(デニング氏・バチェラー氏)——の訪問を受けた。我等の饑ゑたる靈魂は説教其他の宗教的教訓を以て十分の御馳走を與へられた。函館に駐在する英國領事ユースデン氏も亦當地にあつた。彼の滞在せる家にて聖公會式の禮拜が是迄我々が目撃したことのない大規模な様式を以て行はれた。其儀式から人々の受けた一般的印象は、それが稍々佛敎的であると云ふことであつた。祈禱書と牧師の着用した白い法衣、之は宗教は單純なるべしと云ふ我々の考と全然一致しないものであつた。この儀式中に起つた特筆すべき事件は、上級生中の好人物で通つてゐる男や其他が、野人禮に習はずとも云はうか、二人の英國婦人が、其唇を互に接觸せしめて挨拶をかはすのを見て、大きな聲で笑ひ出したことであつた。我々は聖書でラバンが如何に彼の子女に接吻したかを讀んだが、實際の接吻を見たのは是が初めてであつた。我々の不行儀は誠に申譯なくあつた。」云々

六月八日(火)

今日デニング氏石狩川傳道の爲出發す。

六月十一日(金)

今日デヴィソン氏着札す。今夕信者達集會し、札幌公會々堂入費の金子五百圓計り借用致すべきことを決す。

(大島註)。この日四年生及び三年生のクリスチャンが集つて協議した結果、各自は所屬せる

教會より脱會し、外國の教派より補助干渉を受けることなき獨立せる純日本の教會を建てよう
と云ふ議が熟したが、この當時の意氣が、後に札幌獨立教會を生み出す導火線となつたのであ
る。

六月十三日(日) 今日平野小母さん、同祖母及び小笠原富女・デニング氏より受洗せらる。目出
度。

六月廿二日(火) 早朝デニング氏出立す。

六月廿七日(日) バチエラー氏午前十一時ベコ中村にて説教す。(大島註)。牛を飼つてゐた中村
のこと。ベコとは牛のことである。

午後七時同氏再び平野にて説教す。

七月二日(金) 本今朝八時半より十時半まで二時間農學試験。同十時半より十二時半まで土木學
試験。

七月三日(土) 今朝八時半より十一時半まで獸醫學試験すむ。目出度々々々。

今夕卒業生十名柳本の室に集合して菓子會を開く。

七月六日(火) 本日學位の件に就き佐藤昌介・荒川重秀・大島正健を選び、教頭ペンハロー氏及
び校長調所氏に陳情せしむ。

(大島註)。卒業生に授與せらるる學位が、農學士であると聞いた一同は、そのやうな名稱の學
位は受けたくない。バチエラー・オブ・サイエンス即ち理學士にしてほしいと云ふ談判を學校
當局に持ち込んだのであつたが、この要求は不幸にして容れられなかつた。

七月七日(水) 本日學校より下宿申し付けらる。小生等五名(ジョンK伊藤を除く)にて西通りに
下宿す。荷物を送りて平野に行く。

七月八日(木) 今日小生等久しぶりにて日本服をつけ學校へ湯に入りに行く。

七月九日(金) 午前九時學校に集まる。之は農學士の學位に關し學校當局に談ずべき事あればな
り。講堂にて係官と面談せるも其意を果さず。

明日は卒業式なれば軍器を出し帶皮に墨を塗る。

七月十日(土) 今日天氣良し。

今日は卒業式ありたり。午後三時より加藤重任少尉指揮の下に全學生兵式操練を行ひ、次で演武場
内の式場に於て第一回學位授與式舉行せらる。同四時より小生等卒業生の演説始まり、賞金を授與
せられたる後、校長の式辭に次で教頭ペンハロー氏のアドレスあり。終つて學位記を授與せら
る。

午後七時生徒食堂に於て我等のために晚餐を饗せられ、職員生徒相交つて歡を盡す。食し終つて復

習講堂に於て花火を見る。十時頃工業局小屋より出火。これにて皆々退散す。

(大島註)。この日螢雪の功成つて農學士の榮冠をかち得たものは左記の十三名であつた。

佐藤昌介 大島正健 荒川重秀 内田瀨 伊藤一隆 渡瀬寅次郎 小野兼基 柳本通義 黒岩
四方之進 佐藤勇 出田晴太郎 中島信之 田内捨六

選ばれて卒業演説を試みたのは、荒川・佐藤・小野・渡瀬・内田及び私の六名であつたが、前の三名は邦語、後の三名は英語であつた。右終つて荒川が卒業生を代表して邦語の告別演説を行つたが、それから口繪に示したやうな學位記を一々校長から授與された。その文面を見ても明らかである通り、この時は農學士の稱號でなくて授くるに農學士の位を以てせられたのであつて、その書式は工部大學校のそれに準據したと云はれてゐる。この年六月東京に於て駒場農學校を卒業した者が同じく農學士となつたが、南北相呼應して生れ出たこれ等の青年學徒が我國に於ける農學士の先驅をなしたわけであつた。

式終つて卒業生一同は別離の饗宴にあづかつたわけであつたが、この夜校舎及び校庭は提灯の光美々しく飾られ、大通りの農業假博覽會々場内及び開拓使舊本廳南門前の道路で打揚げられた煙花が大いに我等の卒業を祝福して呉れたのであつた。復習講堂で眺めてゐたのはその煙花であつたが、時ならぬ工業局の失火に妨げられて折角の歡樂が滅茶々々になつた。

この日卒業の榮冠を得た十三名のうち、常々病弱であつた中島は卒業後間もなく幽明境を異にした。出田は錦衣歸郷の途次海上猛烈な暴風雨に遭ひ、烈しい船暈に惱まされたことが因をなして東京の地を踏むと同時に頓死した。残る十一名の中には八人の基督信徒があつた。長老佐藤・ジョンR伊藤・内田・田内・黒岩・それから、その顔つきから我らの間にクロコダイルと呼ばれた渡瀬並びに私がそれであつたが、孰れも野人であつたに拘らず、その心底は實に清らかな基督教徒の紳士で、クラーク先生の直弟子としてまことに恥しからぬ人物のみであつた。別れを惜しむ二期生中のクリスチャンの面々は、長く寢食を共にした敬愛する先輩を擁して寫眞を撮り、やがては又兄弟子達に加はつて良き福音の戰士たらんことを堅く約束したが、この日は北海道に神の國が建設されるための第一日として意義深い聖別された日であつたと云ふことができる。

七月十一日(日) 今日日曜日につき、夜に入りベコ中村に集會致すべき所、雨降りたるため中止す。

七月十二日(月) 今夕七時卒業生十三名魁養軒にて會食す。八時頃解散、六人組は平野に行く。

七月十三日(火) 午後より平野にて赤飯其他の御馳走あり。

七月十五日(木) 開拓使より御用の儀有之出頭せよとの達しあり。

故郷に錦を着る

二二四

七月十六日（金） 一同學校に集り午前十時開拓使へ出頭御用係を申付けらる。辭令面左記の通り。

内田 海

御用係申付候事

准判任官月俸金參拾圓

明治十三年七月十六日

開拓使

學校に歸りて受書を出し、次いで金子前借願、金子前借證書等を出して歸省の用意を整へる。

十月十七日（土） 今朝八時頃學校に集り二ヶ月分拜借の金子六十圓請取る。明後日出發するを以て十九日の日附にて歸省出發届を出す。

故郷に錦を着る

滿四ヶ年の間籠城生活を送つたまま一回も歸省の楽しみを味ははなかつた卒業生一同は、螢雪の功成つてめでたく農學士の榮冠を贏ち得た上に、打ち揃うて開拓使御用掛の命を拜し、今は又官費を給せられ、大手を振つて錦を故郷に飾り得ることとなつた。その得意その歡喜筆紙に盡せぬものがあつたが、時は七月十九日午前五時、眠られぬ一夜を假の宿に過した一同は、ガバと臥所を蹴つて立ち上るなり喜び勇んで出立の用意を整へた。八時少し過ぎにははや荷馬車がやつて來た。銘々の荷物を積み込んでそれを先發させ、續いてやつて來た一輛の馬車に分乗して一同は懐しの札幌の札幌の別れを告げたが、校長森源三氏を初めとして職員生徒多數が見送りに來られた。

出立に先だち内田と私とは平野家を訪づれて別辭を述べたが、兩人を乗せた馬車が平野の四つ角を過ぎた際、ジョンK伊藤が駆け出して來て同じ馬車に飛び乗つた。錢函へ着いたのが十二時半であつたので、むさくるしい茶店へ飛び込んで晝食を認めたが、價が十二錢五厘であつただけに、その米の質が悪かつたこと天下無類であつた。これより先は馬車が通はないので、足弱の出田・田内・渡瀬・及び内田の四名が荷馬車に坐乗し、他のすべては徒歩で進發した。一行が小樽へ到着して旅館に落ちついたのはその日の午後四時頃であつた。

内地と北海道との唯一の連絡船であつた玄武丸が、小樽を出帆するのは七月廿四日であつたので、それまでの數日を附近の見學に費し、當日午前十時一同元氣よく乗船してあこがれの内地へと出帆し

故郷に錦を着る

二二五

た。ところが、この航海にはさしたる積荷もなく船足が頗る軽かつたので、船體の動搖甚しく、それに四百名餘りの鯨捕り漁夫が乗つてゐたので、その騒々しい事も一通りでなかつた。幸に伊藤が船の會計係を知つてゐたので、品川まで七圓五十錢の三等切符を求めて乗込んだ一同は中等室に移され、苦難を著しく軽減されたが、天氣晴朗であつたにも拘らず、船の動搖は益々激しく、自分を初めとして内田・佐藤（昌）渡瀬などは、見るも氣の毒なほぎ船暈に悩まされた。

翌朝十一時函館に入港するや否や、一同は命からく上陸して勝田旅館に逃げ込んだが、おなじみのデニング氏・デヴィソン氏並びにバチエラー氏が在留してゐたので、元氣を恢復するや否や皆々打揃うて舊知を訪問し、バチエラー氏の案内で招魂社及び遊園地を見物した。

翌日は雨であつたので散歩も出來ず、一同は旅宿で一日を遊び暮らした。午後六時よりデニング氏に招かれ、バチエラー氏も卓を共にして晚餐を認めた。終つて一同ささやかな集りを催し、共に信仰を語り讚美歌を歌ひ、佐藤及伊藤の兩名が祈りを捧げて散會した。

函館二泊二日の後廿八日午後四時に立武丸は錨を上げたが、今度も亦風波が烈しく中々の難航海であつた。

一步を先んじて錨を抜いたアイオン・デュークと云ふ英國の軍艦が、その昔開拓使の道路開鑿隊を乗せた東京丸が難破した尻屋崎のあたりで坐礁したと云ふ報が入つたが、老練で豪膽な蝦子船長は、

充分な自信を以て立武丸を沖合遙かのコースに導いた。荒浪にもまれる船はすさまじく動搖する。船客一同ヘトヘトに酔つて了つた。函館を出てからは行けさも行けさも陸影を見ぬ。さて何處を漂流してゐるのかと誰も彼も生きた心地が無かつたが、風が收つてその位置を測定したら、危険な陸岸を離れて沖を沖をと航走した結果、船は正に伊豆七島附近に流されてゐた。舵を直角に北に向けて眞一文字に進んで來た船が品川灣に錨を投じたのは八月一日午前九時のことであつたが、船暈に苦しんで船室を出かねた出田晴太郎は、航海中小便をこらへにこらへたことが因をなして腎臟病を誘發し、着京後間もなくあへなき最後を遂げて一同を啞然たらしめた。

思ひめぐらせばはや四とせの昔、悲壯な決意を抱いて北征を志した若人が都に分れを告げたのは、今しも歡喜に湧き立つ胸を抱いて力強く踏みしめた同じ埠頭であつた。船中放歌高吟黒田長官の激怒を買つて危く追放の厄に遭はんとした者共が、業成つて再びゆかり深い立武丸の客となり、茲に東都の土を踏む機會を與へられたのであるから、その喜悅は筆紙に盡せぬものがあつた。内田は芝濱松町に兄と共に假寓してゐる母の許へ、渡瀬は牛込南町の自宅へ、小野・荒川・伊藤もそれくゆかりの家へ、その他は思ひ思ひの知己を尋ねて旅装を解いた上に、更に又懐しの故郷へと旅立つた。その數日間の動靜を内田瀨は次の如く認めてゐる。

八月三日 今夕大島と尾崎に行く。西洋料理を御馳走になる。

(大島註)。尾崎と云ふのは伊藤一隆の義兄で、外務書記官であつた尾崎逸足のことである。

八月四日 本日午後六時柳本方へ五名(伊藤は病氣)集り、札幌耕地の件を相談す。

八月五日 今朝佐藤昌介より書信着。午後二時の汽車にて濱へ行くやう申越す。依つて午後二時新橋を發し、グランドホテルにペンハロー教授を訪ねて別辭を述べ。

八月十日 午前十時開拓使へ出頭。近日汽船にて郷里土佐へ出立の届を出しに行く。午後より田内へ別れを言ひに行き馳走になる。

八月十一日 今朝九時ステーションに着く。伊藤・黒岩並びに柳本に遇ふ。

八月十五日 本日母上と銀座三丁目のクリスチャン・アソシエーションへ説教を聞きに行く。

八月十八日 天氣良からず。正十二時の汽車にて新橋を立つ。雨甚だし。午後二時横濱太田町石川屋に入る。午後四時波止場に行きて立海丸に乗り込み、六時出帆神戸に向ふ。

内田瀨はかくして郷里土佐に向つたが、私はすぐさま相州の實家へ、柳本は生れ故郷の勢州桑名へそれぐ親しい者達を訪ねて出發した。

後志通りの梁山泊

學を卒へた若人達が錦衣歸郷した後は、平野の家は火が消えたやうな淋しさを感じるやうになつたが、一同が出發した同じ月の卅日、彌十郎は茨戸はらとから石狩までの道路改良工事を命ぜられ、請負人や土工共を引連れて花畔はななぐらへ出張し、山本多藏なる者の宅を旅宿と定めて工事に取りかかつた。これは茨戸より石狩まで舊道を廢して眞直に新道を伐り開くのであつて、其總工費二千六百八十七圓四十三錢八厘であつたが、工事監督中であつた八月十九日に、最近四年生になつたばかりの宮部金吾と足立元太郎とが石狩より當別へ行つた歸路であると云つて花畔の土木出張所を訪れた。

九月七日にはかねて上京中であつた伊藤一隆が先づ第一に歸札した。それと前後して函館在住の宣教師デニング氏が又もや札幌に來り、農學校教師であつたサンマース氏の宅へ宿泊した。

このサンマースと云ふのは、嘗て英國キングス・カレッジの教授であつた人で、大阪英語學校御雇教師として來朝してゐたのを、明治十三年六月文部少輔九鬼隆一氏の斡旋により、豫備科英語教師として招聘し、傍ら本科の英文學と畫學とを擔當せしめてゐたのであつて、札幌學校以來數年を経て初

めて豫備科に姿を現はした外人教師である。

さてデニング氏來札の報を得た平野彌十郎は、早速悻の彌市を伴うてサンマース方にデ氏を訪づれ、かねて志願の洗禮を受けて信仰の告白をしたが、その時の感想を彌十郎翁自身筆を執つて次の如く認めた。

「是迄我家は法華信徒にして眞の神の在る事を知らず、己罪人なるをも辨へず、また耶蘇基督によりて罪より救はるる事を知らず、暗きを愛せし者なりしが、我男一隆の導により、始めて眞實の正道に歸し、親族一同皆々洗禮を受けたること此上もなき幸なり。」云々。
この事あつて後、伊藤一隆は次の辭令を受取つた。

御用係 伊藤一隆

七重勸業試験場在勤申付候事

明治十三年十月四日

七重勸業試験場在勤
札幌滞在御用係 伊藤一隆

札幌第二次農業假博覽會委員兼務申付候事

明治十三年十月四日

開拓使

これは七重（今の七飯で函館と大沼との中間）の場長湯地定基が伊藤の才幹を見抜き、卒業當時よ

り彼を所望してゐたので斯く成つたのであるが、同所へ赴任しないうちに又々當局の意が變つて次の辭令が發せられた。

七重勸業試験場在勤
札幌滞在御用係 伊藤一隆

物産局博物課兼製煉課勤務申付候事

明治十三年十月十三日

開拓使

斯くして伊藤一隆は札幌詰となり、主として水産に關する業務にたづさはることとなつたので、かねて居宅の狹隘を感じてゐた平野家では、渡島通りの自宅から後志通り（今の南二條西十丁目附近）坂手文彌の家作へ家賃一ヶ月七圓の約束で引移つた。そこへ歸省してゐた卒業生が續々歸札し、六人組は全部平野方へ同居した上に、柳本は弟彦次郎を伴ひ、田内は弟八男熊を帶同し、私は郷里から農夫仁太郎を引具して來たので、平野の家族共々總計十六名の人數が一つ籠の飯を喰べることになり、その賑かなこと想像以上の有様になつた。

そのうちに六人組の一人であつた柳本通義は伊藤に代つて七重勸業試験場在勤仰せつけられたので、弟の彦次郎を札幌に残して渡島通りの米商後藤半七方へ奉公に遣はし、自身は任地七重へ出發した。時恰も札幌小樽手宮間の鐵道開業式の日であつたので、汽車で出發する同人を一同停車場まで見送つた。東京英語學校以來寢食を共にした學友の一人をかくして活社會に送り出した殘黨は何とは知

らず寂寞の感に打たれたが、茶目振りを發揮することに於ては人後に落ちない伊藤一隆を筆頭に、六人組の中堅であつた内田・黒岩・田内及び私達が一つ屋根の下に、しかも生粹の江戸兒である平野一族の者達と共同生活を営むことになつたのであるから、寄合世帯のこの梁山泊は奇談百出様々な風雲を捲き起した。

當時、伊藤・内田・黒岩及び田内の四名は開拓使の役人としてそれ〴〵適當な部署に就いたが、在校中ミッシヨナリー・モンクと云ふ綽名を與へられたほかに四角四面で、特に英語と數學とを得意としてゐた私は、學友と同じ日附で開拓使御用係准判任官月俸參拾圓の辭令を受けることは受けたが、首席であつた佐藤昌介と共に母校に留つて教鞭をとることを委託された。これが機縁となつて私は遂に全生涯を教育者として終始し、

大島 正 健

札幌農學校ニ於テ定規ニ遵ヒ其業ヲ卒ヘ考試ヲ經テ科第二登ル乃チ授クルニ農學士ノ位ヲ以テス
因テ印ヲ鈐シテ永ク其令名ヲ證ス

明治十三年七月十日

校長 開拓大書記官從五位 調所廣丈 圃

教頭心得 デ・ピ・ペンハルロウ

札幌農學校長調所廣丈ノ申稟ヲ領シ印ヲ鈐シテ之ヲ證ス

開拓長官正四位勳一等 黒田清隆 圃

と卒業證書に明記されてゐる農學士の學位が邪魔でしようがないとかこつやうな生涯を送り、獨學力行、支那古韻の研究に没頭して遂に文學博士と云ふ農業とは縁もゆかりもない學位を獲得すると云ふやうな頗る數奇な運命をたゞる始末となつた。

自畫自讚の嫌ひはあるが、農學士に相違ない私がとんでもない言語學に志した動機を茲で少しく述べさせて貰ふこととしよう。已に述べた通り在學中英語が得意であつた私は、卒業後母校にあつて英語を教授する身となつたが、當時の學生は東北出身の者が多數を占めてゐたので、發音が悪くてほとほと降參した。正確な英語を教授するためには先づ以て正しい國語の假名遣ひを教へねばと思ひつゝ私は、種々頭をひねつた末、やまと言葉の語幹を探り、その變化を科學的に説明して何人も勞せずして正しき假名遣ひを會得し得る「北人假名遣ひ」と云ふ小著を編んで生徒の日本語から矯正してかかる算段をした。私が英語の先生であり同時にまた數學の先生であつたと云ふこと、つまり頭が組織的で物ごとを分解して考へる、言はゞ科學的な要素を多分に持つてゐたと云ふことが、言語の起源を科學的に追求し、獨創的な考を出して研究上の新機軸を出すやうに導いてくれたのであるが、前記の「北人假名遣ひ」と云ふものが私を驅つて支那古韻の研究と云ふ軌道はづれの學問へ進ませる導火線となつたのである。クラーク先生と言語學、思へば妙な方向へ私は走つたものであるが、當時の札幌

農學校の教育が、今日のやうな劃一的な人間を造り出すのでなくて、生徒各自が天賦の性質を引き伸し、思ふ存分手足を伸ばして活躍し得るやう、活きた人間を造り出すと云ふ點に重きを置いてゐたことが、このやうな結果を齎したのであると私は堅く信じて疑はない。

さて我等が起居を共にした後志通りの梁山泊は、町から遠く離れた大きな農場の真中であつた。美しいゼノービアの町の名に因んで學窓にある者共がこれを「荒野の町」と呼んだが、事實に於て此處は夜な夜な狐が出没して雞舍を窺ふと云ふやうなもの淋しい場處であつた。然し初めて家を持つた學士連の歡喜は非常なものであつた。その飛沫が學窓を守る信者共への招待となり、牛肉・豚肉・雞肉・玉葱・馬鈴薯・キャベツなどを一つ鍋に叩き込んで煮たのをつき合ふ愛餐が頻繁に行はれた。

この「荒野の町」なる楽しい家には大きな爐が切つてある客間があつた。その爐に粗朶をくべ、訪ねて來る學生と對座して私が諄々と道を説いてゐると、アーラ不思議や火にかけてなで廻はしてゐた大藥罐が何の挨拶もなしにスル／＼と天井に舞ひ上つてしまふ。そのわけを知つてゐる私は、「さうもこの家には不思議なことが多くてネ」などとすました顔をして辯解するのがその常であつたが、不意打ちを喰つた客は、腰を抜かさばかりに驚いてしまふ。そして、「梁山泊の不思議な藥罐」と云ふ噂がバツと擴がつて訪ふ客の心膽を寒からしめた。何のことはない、これは伊藤の發明であつて、藥罐を吊した自在鍵の繩を天井裏から屋外にのばし、誰かが客室の有様を節穴ふしあなからのぞきなら、

頃合を見計らつてその繩を手繰るのであつた。

或る日のこと、札幌の町に住んでゐる同窓の者共をおびきよせて辛き目に合はせてやらうと云ふ議が熟し、餡のかわりに山葵わさびを詰め込んだ餅を澤山造り上げた。主人側は知らん顔をして餡入りのものを喰べ、客には山葵入りを喰はせる積りであつた。來客が揃つて將に計畫が遂行されようとした際に、何事も知らずに外出してゐた田内が腹をへらして歸つて來た。それで餅を見るなりアツと云ふ間に山葵入りの方を驚づかみにして口へほうり込んだ。萬事休す。計畫はすつかりばれて主人側はいたく油をしぼられた。

口惜しがつた一同はこの失敗を何とかして取り返さうと工夫をこらしたあげく、雪皚々の嚴冬の候に、町に住む者に宛てて御馳走を致し度いからと云ふ案内狀を出した。外套にくるまつた客人達が雪を踏みしめ／＼やつて來て見たら、平野の家は戸障子をとりはづしてあけはなしてあつた。そして住人共は孰れも白地の單衣の夏仕度。手に手に大きな團扇を持ち、「これは／＼お暑いのにようござつた。」とパタ／＼あふぎ立て乍ら、手とり足とり外套や着衣を剥ぎ取つてしまつた。これには客人共肝を潰して退散したが、このやうな馬鹿げた生活を續けてゐては勉強の妨げになると誰云ふとなく云ひ出した。その結果かねて購入して置いた山鼻村の共有地へ適當な家屋を新築して引移らうではないかと言ふ相談が持ち上つて早速實行に取りかゝつた。

初めての結婚式

明治十三年も押しつまつた十二月三日附で私と伊藤とは次の辭令を受けた。

御用係 大島 正健

月俸金四拾圓被下候事

明治十三年十二月三日

開 拓 使

御用係 伊藤 一隆

月俸金三拾五圓被下候事

明治十三年十二月三日

開 拓 使

越えて九日彌十郎翁は職務勉勵のかさで開拓使より慰勞として金拾圓を下賜された。

これより先、山鼻村の共同耕地を世話してくれた小笠原豊吉の娘富子とジョンK伊藤との間に婚約が整ひ、十一月廿日には結納の取りかはしが済んでゐるが、翌十四年三月三十日函館よりデニング氏が來札したのを幸ひ婚禮の式を擧げることとなつた。

春とは云へざこの日は稀に見る大吹雪であつた。簡單質素であつた當時のこととて、十七歳の花嫁の富女は無雑作な縞の衣服に藁靴をはき、同じく藁靴をはいて降りしきる雪をかきわけかきわけ進んで行く平野彌十郎夫妻に伴はれて、式場なる創成通中村守重宅となつてゐた聖公會の教會堂へやつて來た。新郎なるジョンK伊藤は江戸ッ子で中々のハイカラ好みであつたので、そこで新調したのかこの日はスマートな燕尾服を着用に及んでゐた。式は午後五時半より行はれたが、何しろ「イエスを信ずる者の誓約」に署名した者の中に湧いて起つた最初の結婚式であつたので、同窓の學士連は勿論のこと、基督信徒學生の全員が滿腔の喜を胸に湛へてこのめでたい式に連つた。儀式は聖公會の仕來り通りに行はれ、花婿と花嫁とは聖壇の前に立つて指輪を交換した。これは我國古來の結婚には見られない異風景なので、會衆一同奇異の眼を見はつてゐるが、めでたく式が終るや否や、在來の習慣に従はないで、列席者一同に其場で茶菓が供せられた。新郎新婦の前途を祝して數人の學生が熱誠をこめた演説をした。主客歡を盡して散會したのは午後十時過ぎであつたが、洗禮を受けたのも結婚式を行つたのもジョンK伊藤が先頭を切つてゐたのはさう云ふめぐり合はせであつたのであらうか。

「願くはエホバ、汝の家に入る所の婦人をして彼のイスラエルの家を造りなしたるラケルとレアの二人の如くならしめ給はんことを。」

と親しき友達が送る祝福の言葉を喜び受けて、この日より彼は紅一點とも云ふべき新生活に一步を踏

み出すこととなつた。

かくして後志通りの梁山泊は益々狹隘を感じるやうになつたところへ、黒岩四方之進は國許から母を呼び寄せた。これではたまらぬと云ふわけで、山鼻村の共有地へ今日の言葉で云へばアパート式の家屋を新築してゐたのが七月廿五日に落成したので、左の通り費用を分擔して支拂ひ一同は心地よい新居へ移轉した。

一、金三百拾六圓六拾七錢四厘

平野住居の分

一、金百四拾貳圓拾參錢貳厘

黒岩住居の分

一、金百九拾九圓九拾貳錢

内田・大島・田内住居の分

一、金百七拾五圓

馬屋一棟分

合計金八百參拾參圓七拾貳錢六厘

五人組は各自開拓使より乗馬を拂ひ下げたので總計五頭の駿馬がゐた。その上私は卒業歸省の際、幼時の趣味を棄てかねて國許から立派な黒軍鶏くろしやもひとつがひ一番をかついで來たので、さらでだに賑やかな山鼻の家は、後志通りの家にもまして陽氣な住居となり、踵に喰ひついた軍鶏を激怒した黒岩が蹴とばしてその嘴を曲げたとか、圖太い農夫の仁太郎が鶏舎の卵を盗んでは町へ賣り飛ばしてゐたとか、この家は又書いても書ききれない様々な挿話を生み出した。

楽しい山鼻の生活が続いて居るうちに伊藤と私との間に議が熟した結果、明治十四年九月廿七日父の正博から平野彌十郎宛にその次女千代を正健の妻に所望の旨を認めた次のやうな書狀が到達した。

「正健儀農學校を卒業し札幌を永居と定め候上は、一身孤獨の正健にて一生を送るべき次第にも之無く何れか配偶の道求め度、就ては切に願入候は貴家令嬢を正健へ御娶はし被下候はば正健並に當方に於て重疊の事右御許容相成度」云々。

右に關し平野家一同相談の上承引の趣直ちに返書が差出された。かくして學窓以來寢食を共にした盟友ジョンK伊藤が私にとつては義兄たる位置に立つこととなつた。

ここで序であるから長く人生の歩みを共にした伊藤一隆に就て少しくその思ひ出を語らせて貰はう。ジョンK伊藤は二十二歳で卒業したが十三人の卒業生中での順位は尻から二番目であつた。英語は達者であつたけれども數學が不得意であつた事がこのやうな結果を生んだのであらう。然し彼は中々の交際家で知己が多く、常識にすぐれた實際家としてはその才能校中隨一であり、開拓事業のために優秀な人物を養成する札幌農學校の目的にはまことに適つて居た。昭和四年一月五日聖戰の勇士として天父の御許に凱旋した彼を送つた内村鑑三は、その告別の辭に於て次のやうに述べて伊藤のこの特質を禮讚した。

「我等の愛する伊藤一隆は永き眠に就きました。彼は孰れの方面より見るも著しい人物でありまし

た。勿論何人にもあるやうに彼にも短所がありました。彼は所謂學究の人ではありませんでした。神學や哲學の廻り遠い道は彼の堪へ得ざる所でありました。

彼は繁文褥禮の役人風に堪へませんでした。然し乍ら世に若し常識の人があるとしませうならば、彼はその典型でありました。彼は一見して事物の理非善惡を識別する驚くべき能力を有しました。私共彼の友人の多くは六ヶ敷場合を彼の判断に委ねました。そして彼の判断は大抵誤りませんでした。そして判断の事項は人生日常の實際問題に限りませんでした。或る場合に於ては教理の六ヶ敷い問題に於て伊藤の判断を求むるのが解決の捷徑でありました。彼は眞理を直觀する非凡の才能を有しました。彼の賛成を博することは自己の信念を確保する有力なる途でありました。

この能力を以てして彼は事に當りて成功は確實でありました。北海道に於ける水産事業、越後に於ける石油事業、凡てが成功でありました。然し伊藤一隆を知る者の常に不思議に思ふことは、彼が何故に此世の所謂「成功者」としてその一生を終らなかつた乎、その事であります。彼は能く成功の秘訣を知りました。そして彼はその驚くべき才能を以て多くの人を富ました。然るに彼自身は貧しき人として終始しました。明治大正の世にありて、その點に於て彼は一つの大なるエニグマであります。彼は富を作るの途に精通して自身は富を作り得ず、又作らんとしなかつたのであります。彼に若し富者たらんとする欲がありましたならば、彼は廣大なる漁場の持主でありましたら

う。或は日本石油株式會社其他の有利會社の大株主の一人でありましたらう。然るに彼には富を造るの技術があつてその欲がなかつたのであります。」

實に内村の言の通りであつた。彼は明治十三年七月札幌農學校を卒業すると同時に开拓使御用係を申付けられ、水産課勤務となつてこの方面の事業に精進した。明治十九年漁業取調を命ぜられて渡米し、漁夫に伍して北大西洋に鰹釣りを試みたり、或はメーン州バックスポーツ孵化場で鮭鱒孵化技術を實地に習得する等つぶさに辛酸を嘗めて翌廿年に歸朝し、當時頗る幼稚であつた我が水産業界に重要な新知識を齎らした。

その頃、开拓使は北海道廳となつてゐたが、伊藤はその水産課を統率して勤務中三大功績を挙げた。その一つは米國式の鮭鱒孵化場を北海道に創設したことで、歸朝後間もなく全道の湖川を踏査してその適地を求め、遂に石狩川の一支流千歳川の上流に滾々として湧出する適水溫の水域を發見し、前記バックスポーツ孵化場に習つて完璧の鮭鱒孵化場を開設した。その歴史に於て最も古くその設備に於て本邦随一である現時の千歳鮭鱒孵化場はかくして生れ出たのであるが、北海道鮭鱒孵化事業の生みの親としての彼の功績は、千歳孵化場創設者として同孵化場に掲げられてゐる彼の小照と共に長く人口に膾炙するところとなつてゐる。

北海道漁業に關する第二の功績は寒中氷結せる洋上で鰹を釣る技術を漁夫達に教へたことである。

これも米國土産の一つであるが、今日では氷を割つて群集する水下魚を釣獲することは漁業の常識となつてゐる、その生みの親が伊藤である事を知つてゐる者は皆無であるのは聊か淋しい感じがする。

第三は紛糾甚しかつた漁區の整理に成功したことである。これは當時最も困難な事業の一つとされてゐたことで、下手にやれば漁民一揆をも起しかねまじき問題であつた。初期の北海道に於ては早く移住して來た漁民達は勝手に漁場を獲得して居たが、次第に漁民の數が増すに従つて漁區が錯綜して混亂を來し、海上に於て血なまぐさい争闘が頻發するやうになつた。そこで道廳でも漁區の整理を敢行せねばならぬこととなつたが、漁民共は既得權を固持して命に従はうとせぬ。しかるに海岸線は彎曲して居るからその割合には沖の海面が狭い。従つて陸では漁區の區別が明示されてあつても、沖へ出れば漁場が重なり合ふ次第であつたから、これを整理する際には少しは既得權を放棄させねばならぬし、犠牲者も出さねばならぬ。それがため争議を生じて事は中々收まらなかつた。この困難な事業に關して伊藤が快刀亂麻を斷つ成案を胸に秘めて居ることを知つた長官は、或日彼を呼んでその意見を聴取した。これには非常にうるさい抗議が起つたり讒誣中傷の言が出たりするにきまつて居るが、絶対に伊藤を信じて全權を委ねて貰ひたいと彼は申出で、海岸にベースラインを引いて根本的に漁場を整理する案を説明した。長官はその獻策を容れて萬事を一任したので、彼は勇躍その難事業に着手した。ところが時には流血の慘をも惹き起すことと豫期してゐたその大仕事は、彼の人格の光と冴え

た腕の切れ味とで平穩無事にスラ／＼と解決し、さしにも難問題とされて居た漁區の整理が立派に成功した。

これはジョン・K伊藤の技術識見以外にその勇氣と果斷と清廉潔白との致すところで、如何に頑迷な漁夫達でも道理と公平との前には頭を下げざるを得なかつたのである。彼等はその心情が單純であるから普通の人々よりも却つて義を重んじ感激性に富む。權威脅迫を武器とし黄白に節を屈するところに不平と紛議とが生ずるのである。ところで伊藤は權力や脅迫などにへこたれる男ではない。何事にも一命を投げ出してかかる生粹の江戸ッ子で、黄白では魅し兼ねる潔白な基督教徒である。その上に彼は人をして感激せしむるだけの情熱を持つて居たので、單純率直な漁夫達は伊藤の前には一言もなく心服し、伊藤の爲とあれば命を投げ出しても惜しくはないと云ふ信頼感を抱くやうになつた。これが無事迅速に漁區整理の成功した所以であるが、その原動力たるやクラーク先生によりて點火された清い平信徒的信仰であると云はねばならぬ。彼は純信仰と稱して實際に人と社會とを益せざる理想空論の價値を認めなかつた。「神はこれにすがれと天から常に梯子を下げて居なさる。それが見えないうで自らよぢ登つて來ない奴は、いくら神様でも引き上げようが無いからナ」と彼は口ぐせのやうに云つてゐるが、これは只人の前で祈り叫ぶのみで進んで何事をもなさぬパリサイ人のやうな信者に對する彼の意思表示であると云つてよい。彼の全身全靈の精力は彼がキリストの十字架を説く時に注がれ

た。彼は聖書と祈禱なくして人は活動力のない蟬のぬけ殻であることを意識してゐた。故に友と別れるに臨んで彼が常に言ふことは、

「君祈つて呉れ給へ。」

であつた。そして彼自身の祈禱には異常の力があつたので、私共は集會毎に彼の説教を聞くよりも彼の祈禱を要求した。帝國水産會社を經營し、轉じて石油事業に身を投じた彼は、晩年老を東都の一角に養ひ、日曜毎に柏木今井館聖書講堂に姿を現はして老友内村鑑三の聖戰を扶けて居たが、その集りに伊藤と私の姿が見えることは、百萬の援軍を得たよりも力強い感がすると内村は述懐し、眞に力強く神の道を説いてゐるが、時折講壇から要求されるものは昔ながらの彼の祈禱であつた。そして力強い彼の祈りは會衆一同の胸に聖火を燃やさずにはおかなかつた。

敬虔な基督信徒で生涯を禁酒運動に捧げたジョンK伊藤には様々な餘技があつた。彼の手品はごくで習得したものか絶妙の域に達し立人の松旭齋天勝なごから先生々と立てられて居た。實に彼は天勝の奇術の種の提供者でもあつた。彼の書架はマヂックの書で充され、書齋には手品の道具が山と積まれ、宴會なごに着て出るイヴニングなごは卽座に手品を演じ得るやうに數知れぬ隠しポケットがしつらへてあつた。演技の際は彼はきまつて、

「ブツケンハナミクラメ」

と云ふ呪文を唱へたが、これは「見物は皆めくら」と云ふ事さと笑つて居た。尙一つ彼が得意であつたのは洋樂で、札幌で北海禁酒會を造つた際には樂隊を編成し、自ら樂長となつて指揮棒を振つて居た。

伊藤に就て云ふべきことが尙一つある。それは“Association”と云ふ言葉とその事業とを米國から輸入し、それを「協會」と譯して北海道水産業を處理する北水協會を創立したのは實に彼であつた。

「協會」と云ふ語の生みの親たるジョンK伊藤を知る人も今は無いであらう。

若かりし日の我等同窓の山鼻生活、思へば賑やかでもあり楽しくもあつた。正月を迎ふる毎に百人一首のカルタ合戦に熱狂する黒岩や私達の仲間には彼ジョンK伊藤は決して加はらなかつた。このやうな方面には興味を持たなかつた彼は、同志を集め石油罐を叩いて家の廻りを廻り、喧騒妨害これつとめたものであつた。そのカルタ取りたるや組みつく、振り合ふ、勇壯活潑を極めたもので、親子で對陣した黒岩は土佐辯まる出で「おか、様！」と叫んで母にしがみつく。母もまた負けずに「これ四方之進！」と悲鳴をあげてせがれの手をおさへる。とんだ喜劇に一同腹の皮をよると云ふ有様であつたが、このやうな行事を書き立てれば切りが無いから、山鼻生活の狀況は先づこの位で止めて置かう。

美はしい友情

明治十三年七月農學士の榮冠を贏ち得た第一期生との別離を惜しんで第二期生の信徒達が共に會食した際、近き將來には共同の力で禮拜堂を建て、クラーク先生によつて始めて傳へられた神の道を廣く隣人にも分たうではないかと云ふ相談が持ち上つた。

その頃監督教會即ち聖公會の宣教師デニング氏は、北四條東一丁目に講義所を開いてゐたので、さきにハリス氏より洗禮を受けて何心なくメソヂスト教會に入會した二期生の信徒達は、校内に於ける在來の集會を廢してそれに出席することにしてゐた。ところで青年信徒間に一つの會堂を建設するの議が熱し、遂に長老・ミッシヨナリーモンク・クロコダイル・エドウキン及びヨナタンを設立委員に選んだりするまでの情勢になつたので、先づ以て一同はその計畫をデニングに打ちあけて彼の助力を乞はうとした。ところがその舉に對して彼は快く同意を與へなかつた。然るにそれを聞きつけた米國のメソヂスト教會では、そのやうな快舉に對してなら、資金として金四百弗の補助を與へようと申出した。時は明治十四年三月十八日である。

然し理由なしに寄附金を受ける謂はれが無いので、その四百弗は一時借用して出来るだけ早く返済することにしようと思つた。それには色々理由があつた。先づ第一に教會の敷地を求めるとは二百圓を見積らねばならぬ。建物並びに設備の費用としては約五百圓、併せて七百圓の金子が要るが、米貨四百弗と云へば正に七百圓である。天の恵みである。感謝してこれを享けるべきである。一同は考へた。さて退いて考へて見ると、學士の冠榮を贏ち得た者達の収入は月三十五圓そこそこである。各自最善の努力を盡したとしても、短期間にかかる大金を返済し得るであらうか。教會堂建設への第一歩を踏み出すに際して各自の胸に早くも一抹の暗雲が漂つたが、絃を離れた征矢は戻らなかつた。建物の設計は立派に出来上り、三月廿四日には、メソヂスト教會の牧師デヴィス氏から約束の爲替が到着した。臨時會計係を仰せつかつたヨナタンは、早速それを現金に替へ、寄宿舎の自室に厚さ三寸の紙幣の包を持ち込んだが、これは生れて初めて彼が手にした最大の金額であつた。

さて會堂新築の機運は斯くして動き出したが、一難去つて一難來るとでも云はうか、信徒達が買はうと志した敷地は故あつて手に入らないこととなつた。爲に勢ひ込んだ新築計畫は全然放棄しなければならぬこととなり、米資による大きな負債を負ふよりは何とか消極政策をとる方が宜しからうと云つて凡ての者が思ひあきらめた。

然し茲に一つ解決のつかない難問題が残された。建物委員の一人で事務家であつたエドウキンは、

會堂新築の用意に取りかかつて早くも大工に木組を命じてゐた。命を受けた大工は早速袖夫を山に入れて伐木製材に取りかかつてゐたので、形勢が逆轉したからと云つて大工を見殺しにするわけには行かず、その損害を支辨してやらなければならなかつた。

エドウキンは苦衷を建築委員達に訴へてその解決方を懇願したが、長老とクロコダイルとは、委員會に於て承諾した事でないのをエドウキンが先走りをしてやつたのであるから、損害を支拂ふべき責任はないと主張した。然し私とヨナタンとは考へを異にしてゐた。大工はエドウキンの命を委員會の命なりと思惟して行動を起したのであるから彼に少しも罪はない。忠實なる良民に損害をかけてはダビデの家は民衆の信頼を失ふであらう、若かず、損害を支拂はんにはと。されど長老とクロコダイルとは法律的責任論を固守して頑強に責任を回避し、他の委員達もそれに應じたので、善良なエドウキンは死地に突き落されてしまつた。

ヨナタンと私とはかかる仕打ちに耐へられなかつた。そこで或寒い冬の朝雪の上に相會して思を練つた。そして友人エドウキンのために自分達兩人でその責を負ふことにしようとして取りきめた。兩人は早速エドウキンを尋ね、自分達は貧しくはあるが、貴公が不利な取扱ひを受けるのを見るに忍びない。大工への損害賠償は僕達で引受けようと申し入れた。心の美しい感激性に富んだエドウキンは、大きな眼に一杯の涙をためて友のなさを感謝した。そして、「君達が二十圓を負擔してくれるなら

残り僕が責任を負はう。」と申し出た。ところでヨナタンはまだ一介の學生であつたので開拓使より與へられる全収入は一週二十錢に過ぎなかつた。そこで水魚の交りを結んだ私が今度はヨナタンの加勢に出た。「宜しい、僕が全額を支拂はう。君は来る七月學校卒業後の収入で僕に支拂へばよい。」と。さしもの難問題もこの仔羊達の美はしい自己犠牲を以て首尾よく解決した。その隠れた働きを後に聞き傳へた善良な内田澗と藤田九三郎とは、義憤を起して私共に加勢をした。そして互に負債の一部を分擔して事件を圓く収めてしまつたが、仔羊達の斯る美はしい愛の心が礎となつて札幌獨立教會は遂に生れ出たのである。さて神を拜するための家の新築が中止されてみると、第二段の策戦として既に建つてゐる適當な家屋を買ふか借りるか、その二つの途の一つを選ばねばならぬこととなつたが、春たけなはの四月の終りになつても良き禮拜の家を得ることが出来なかつた。見よ、聖公會の信者達は既に禮拜の家を持つてゐるのではないか。

何がために農學校の青年信徒はその流に合流しようとしないのであるか。理由は極めて簡單であつた。「主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ。」純なる仔羊達の抱懷する思想は之であつた。何故に同じ道を説く基督教に聖公會とメソヂスト派との二つの流があるのであるか。何故に小さな札幌にまで教派の争が滲み込んで各派の宣教師達が互に牙をむき合ふのであるか。目のあたり教派主義の弊害を感じ初めた青年信徒達は、「イエスを信する者の誓約」に署名したもののさもの一致獨立を策し、教派

的に汚染されない神殿を守つて清き禮拜を續けて行かうと云ふ念願を起したのである。

教會獨立問題に關して最も急進的であつたのはヨナタン内村鑑三であつた。私と好人物で通つてゐた内田瀨とはヨナタンの支持者であつたが、彼の如く獨立運動の成功を確信してゐるわけではなかつた。五月十五日の日曜日を期し、信徒一同は相會して獨立問題を討議した。世故にたけた長老とクロコダイルとは中々慎重で、獨立教會設立に關しては容易にうんとは云はなかつた。

然し獨立の叫びは中々優勢になつて來た。勢を得たヨナタンは五月廿二日日曜日の夜、かの「荒野の町」なる梁山泊に私を訪ねて獨立教會の憲法を起草した。

二十そこそこの二人の青年學徒が斯る大それた仕事に着手してゐるところへ、四百弗の資金を提供したメソヂスト派の宣教師デヴィス氏がやつて來た。傳道のため札幌に滞在した九日間に、彼は青年信徒がメソヂスト教會に反旗を翻して分離する機運が濃厚であることを看取した。そして顔をしかめながら任地の函館へと引上げた。

六月廿六日。第二期生にとつて最終の日曜日が早くも廻つて來た。七人の基督信徒達が四年の間祈を共にした樂しかりし教會がこの日を以て解散されんとするのである。メリケン粉樽の講壇よ、さらばである。長くその樽を覆うて威嚴を添へて呉れた青毛布よ、さらばである。

親しき兄弟等は相集つて心からなる祈を捧げて感謝の禮拜を行つた。ヨナタンは先づ立つて、「天

國の爲に何處に遣はさるるもその場所は選ばざるべし。」と云ふ趣旨の感話を述べ、チャールスは此の世の事業に従事しつつ如何にして御國の爲に働かんかを述べた。次でフランシス、エドウィン、パウロ、ヒューが交々立つてこの集會により如何に多くの利益を得たかを物語つた。列席した卒業生達が弟分達に對して様々な奨勵を興へ、斯くして學校生活中未だ嘗つて無かつた印象深い集りは終りを告げて、寒暑を凌ぎ愛情を越えて天父の御榮をたたえたこの小さな教會は解散されたが、多面多角なる多くの人の心をイエス・キリストの御名によりて縫ひ合せてくれたこのささやかな教會こそは、内村鑑三を生み、新渡戸稻造を生んで、日本國を光榮あらしめた其の搖籃として永遠に記念すべきものであつたのである。

聖戰の戰士を加ふ

明治十四年七月九日土曜日、この日こそは四年前玄武丸によつて送られて來た第二期生達が、卒業の榮冠を贏ち得る光榮の日であつた。最初校庭に鳴り響く讚美歌の聲に脅威を感じながら入學した同窓は總計廿一名であつたが、病氣と退學と原級に留まる者によつて、この日の盛儀に列し得る者は

次の十名に減じてゐた。

内村鑑三 宮部金吾 高木玉太郎 南鷹次郎 足立元太郎 太田稻造 廣井勇 藤田九三郎 岩崎行親 町村金彌

これ等の中でヨナタン内村、フランシス宮部、パウロ太田、チャールス廣井、エドウィン足立、ヒュー藤田、フレデリック高木の七名が終始變らぬ基督教徒であつたが、卒業式に際して上席の七名を占めたのはこの七人の基督教徒であつた。非基督教徒が基督教に反對した主要點は日曜日に勉強を許さないと云ふにあつたが、安息日の律法を守り通して日曜日には決して机に向はなかつた者共が、最後の審判に於て轡を並べて級中の上位を占め、その中の六名までが榮ある卒業演説を試みて賞與を獲得した。神の榮光が現はれたのである。反對せんがために反對する非基督教者と敬虔なる基督教者との實力の相違がゴールに於て歴然と現はれたのである。

この日午前十一時、定めに従つて卒業生を併せた本科生四十五名の兵式操練が校庭に於て行はれ午後二前より卒業證書授與式が舉行せられて次の卒業演説が行はれた。

邦語

- 一、最高なる道德の準度は北海道農家に緊要なり 廣井勇
- 一、植物學と農學との關係 宮部金吾

一、漁業も亦學術の一なり

内村鑑三

英語

- 一、化學と農業との關係 高木玉太郎
- 一、快哉苦役の樂 足立元太郎
- 一、農業は開明を贊く 太田稻造

終つて拍手喝采場裏に學位(稱號)の授與が行はれたが、主席であつた内村鑑三は、卒業のクラスを代表して聲涙共に下る卒業告別の辭を述べた。當時一年生として席末に連つてゐた志賀重昂の札幌在學日記中に此の時の光景が次の如く記されてゐる。

「……終りて内村氏卒業生に代りて校長に多年教育の厚きを奉謝せらる。尋で御雇教師に奉謝せらる。言活潑覺えず人をして動搖せしむ。尋で三年生及び吾輩を獎勵する語あり。嗚呼、氏は耶蘇教の徒なり。故に常に吾輩と仇敵なりしが、今日其慷慨悲憤の言辭を以て吾輩を獎勵したりしは、仇ながらも至誠の然らしむる處、覺えず感涙を催したり。次に同級生に向ひ、今吾輩は本校の學科を卒業したりと雖、決して溫袍に安んずる者に非ず。此より艱難の道に入りぬべし。今日は其艱難の途の門戸なり。諸君よ、請ふ、安逸にせず、其屍を北海の濱に曝すの素志を棄つる勿れと。謂ひ終りて衆爲に泣き、默焉として前の如く一も拍手する者あらざりき。」云々。

第二回卒業生一同は、明治十四年七月廿九日附で開拓使御用掛（準判任官月俸三十圓）を申附けられたが、俊秀であつたヨナタンは民事局勸業課勤務の命を受け、専ら水産の調査に従事することとなつた。任官後卒業生一同が錦を故郷に飾つたことは第一回卒業生と同様であつた。

秋になつて凡てが任地に歸來してから、ヨナタン内村・エドウキン足立・ヒュー藤田・チャールス廣井及びパウロ太田は一軒の家を持ち、一つ屋根の下に楽しい共同生活を始めたが、植物學を専攻したフランシス宮部は東京帝大理科大學にあつて研鑽の命を受けたために、なつかしの友と袂を分つて獨り都に留つた。

志賀重昂と云へば彼も亦札幌農學校が生んだ人材の一人であつた。その卒業年次は第四期で、早川鐵治・渡瀬庄三郎なごと同期であるが、彼に就ては次のやうな挿話が残つてゐる。

彼は最初札幌農學校の實質を知らず、只その名にあこがれて札幌へ來ては見たものの、其期待と實際との開きは非常に大きかつた。随つて、「俺は間違つてこのやうな學校に來た。」と口癖のやうに云つてゐた。そのためでもあつたらう、常に不満々で少しも勉強せず、成績は頗る不良であつた。中にも數學は最も不得手で、或る年には危く數學で落第の憂き目を見るところであつたのを生徒一同の嘆願によつて助けられた。

或る冬のこと、各室にストーブが据ゑつけられたが、未だ火を焚くべからずと云ふ布達を破つて志賀が火を焚き出した。大目玉をむき出した舎監は早速志賀を舎監室に呼び出して始末書の提出を命じたが、茶目氣のある彼は早速筆を取つて、

「小生儀禁を犯して骨拙こつせつを焚き云々」と書き下して規則違反の始末を記述し、最後を、
「實以て恐れ入り申し候」

と結んで、それとなく舎監を愚弄した。骨拙とは漢詩の用語で薪のことであるが、その頃から一かきの漢詩人であつた矧川の面目躍如たるものがある。

その頃札幌農學校の職員間には詩作が可なり流行してゐた。中にも幹事の某は頗る熱心であつたが、或る日志賀はその机上に次の如く認めて置いて來た。

公書滿案繙遅々 休筆沈思時已移
借間風流鬢幹事 廳中作出幾篇詩

それを盗み見た體操教官の老少尉がうまいうまいとほめそやしたので、幹事先生烈火の如く怒つて少尉と志賀とに喰つてかかつた。

或る支那の新聞に「日本に二人のシガあり。其一人は姓を志氣と書す。年末だ若少なれさも頗る漢詩を能くす。他の一人姓を志賀と書す。白髮の老人にして談論風發大に國事を談ず。嘗つて亞細亞同

初めて錦旗を仰ぐ

二五六

盟を説きたる者あり。翁色を作して其不可なる所以を力説せり」と書いてあるのを訪客に示した矧川が、「見給へ、支那では俺を二人の人間にしてゐるぞ、ワッハハ……」と豪傑笑ひをしてゐるが、志賀重昂の詩は支那人が感服するほき堂に入つてゐた。

初めて錦旗を仰ぐ

後志通りの梁山泊に籠つた一同が山鼻の新居へ移轉して間もなく、平野彌十郎は小樽永井町の急な坂道を切り下げる工事施工のため出張を命ぜられた。

ところで開拓使設置以來既に十年以上を經過して治績漸く擧がり、札幌鐵道亦既に竣工したのを聞召された天皇陛下には、左大臣有栖川宮熾仁親王殿下を始め奉り、參議大隈重信・同黒田清隆・内務卿松方正義等を供奉の人員に加へさせられて、北海道御巡幸あらせらるべき旨仰せ出された。俄に奉迎の用意に取りかかつた開拓使に於ては、先づ第一に錢函に御野立所を用意せねばと云ふので、小樽滞在の彌十郎に命じて施工を急がせた。次に又小樽停車場から行在所と定められた量徳學校までの道路の切開き、砂利敷き、其他の附帯工事をも彌十郎に命じて期日通りに工を終らせ、以て鶴駕の御來

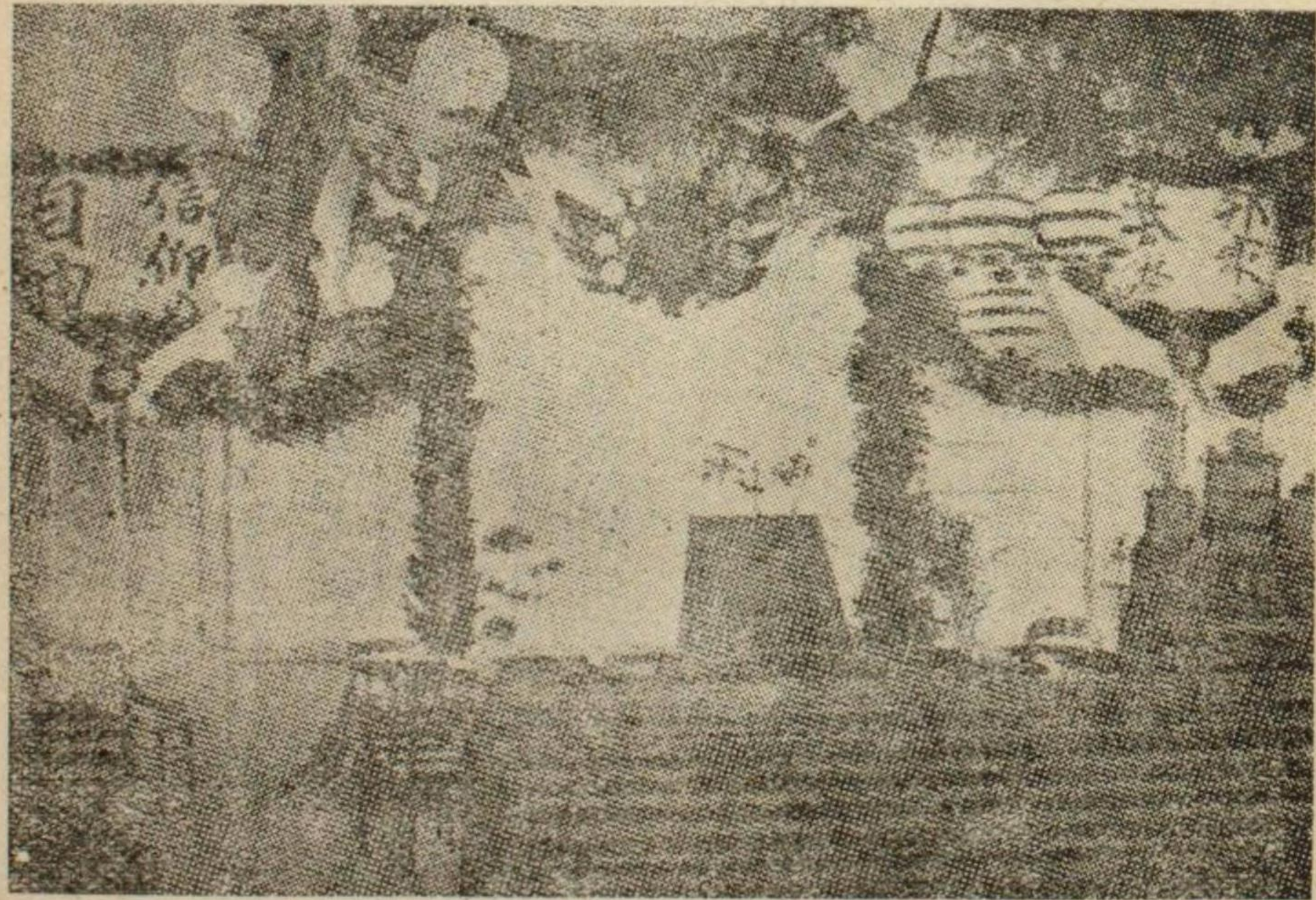
第二回卒業生（直後の撮影になるものから）



内村鑑三

太田稻造

宮部金吾



大日本帝國憲法發布記念祝賀式當日の札幌獨立教會
(藤田九三郎設計、大正十一年五月迄使用)

着を御待ち申上げた。

檣頭高く錦旗を翻した御召艦は、八月三十日午後六時威風堂々と小樽へ入港したが、この日陛下には小樽には御滞泊あらせられず、手宮に御少憩の後、汽車で札幌に向はせ給ひ、かねて行在所と定められてゐた豊平館に入らせ給うた。

翌三十一日午後二時、炎暑の折柄をも御厭ひなく、畏くも陛下には札幌農学校所屬農園に臨御ましまして學生の農業實習の有様をみそなはせ給うた。先づ御通路右側にある牧草畑で西洋大鎌を揮つて牧草を刈取る實況併びにモーター・テッダー及びホースレーキを順次使用して牧草の收穫をなす有様を御覽あり、更に車駕を農園事務所前に進めさせ給ひ、先づ三頭牽プラウを用ゐて土を耕し、次でハローを掛け、最後に播種機で裸麥の種を播くアメリカ式大農法の實況を觀覽あらせられた。それより畜舎に玉歩を進めさせられ、馬車積の牧草及び牝牡の牛二頭を秤量する光景をみそなはせられ、更に又排水土管製造所に於ては、土管製造の實況併びに土管の排列方法を觀覽あらせられた。

翌九月一日午後二時、陛下には札幌農學校に御臨幸あり、先づ以て演武場に入御あらせられた。この演武場と云ふのは明治十一年十月十六日私共が三年級であつた時に竣工した建物であつて、建坪百十三坪餘の二階建てで、階上に教練室、武器室、階下に博物標本陳列室、標本整理室併びに二つの教室があつた。高く聳ゆる塔上には米國に注文して出來上つた大時計が取付けられたが、これは竣工後約

三年を経た明治十四年六月の事で、御臨幸を迎へる直前であつた。爾來この時計臺から鳴り響く鐘の音が構内に向つて一齊に時を報ずるやうになつたのみならず、札幌全市に對して標準の時を示す重大な使命に服することとなり、札幌農學校に學んだ者にとつては忘れがたなの記念物として特別な親しみを感じさせるものとなつた。

さて、陛下がこの建物に玉歩を進めさせ給ひし際には、階下の左の教室に於てはブルックス教授の農學、右の教室に於てはサンマース教授の英語の授業が行はれてゐた。その授業振りを御覽あらせられてから博物室に御歩みを移させ給ひ、様々な陳列標本に御目を注がれ、次で實驗室に於ける學生等の物理化學に關する實驗をみそなはせ給うた。

現今北海道大學附屬植物園内にある自然博物館の前身であつたささやかな陳列館は、この頃伊藤一隆の設計により、小宮與吉の請負で建築落成したもので、當時は博物所と稱してゐたが、札幌御滯泊中陛下には佐藤書記官の御先導でこの博物所へも玉歩を印せられ給うた。布衣の身ながら伊藤一隆は、陳列せる博物標本に關する説明を申上ぐる光榮に浴した上に、九月二日札幌御發輦、室蘭を経て陸路御還幸の際には室蘭まで扈從を仰せつけられ、駿馬に鞭うつて御伴申上げた。

その御行程を畧記し奉れば、札幌御駐輦は三日間にして九月二日午前七時御發輦、當日は千歳泊り。三日白老泊り。四日室蘭泊り。五日海上二十五里を御船に召されて森泊り。六日函館御着の上、

二日間御駐輦、九月八日海路五十六里半を御船で青森に渡らせ給ひ、それより陸路東京へ御還幸遊ばされた。この行幸は東京御發輦より御還幸まで陸路四百八十二里三十五町三十六間五尺、海上二百十二里、鐵路九里二十八町、御休憩箇所五十五、御泊り六十二、御駐輦十日、船中一日であつた。朔風にはためく錦旗を大過なく御送り申上げた開拓使當局は、ホッと胸をなで下し、行幸事務にたづさはつた人々に行賞の擧に出でたが、特に御役に立つた平野父子には左の通りの賞があつた。

雇 平野彌十郎

御巡幸御用取調方格別勉勵候に付慰勞金五圓被下候事

明治十四年九月廿一日

開 拓 使

物産課御用係 伊藤 一 隆

御巡幸御用取調方格別勉勵に付爲慰勞金五圓被下候事

明治十四年九月廿一日

開 拓 使

御巡幸に關する殘務全く終了して一同安堵の思をした九月廿七日、郷里の父大島正博から平野彌十郎宛の手紙があつた。これは彌十郎の次女千代子を私の妻に申受けたいと云ふ相談で、既に記した通りである。それが錦旗を北地に仰いだめでたいその年の出來事であつたと云ふことも奇しき縁であつたと云はねばならぬ。

開拓使官物拂下げ事件

明治天皇陛下が御機嫌麗はしく東北北海道を御巡幸あらせられてる間に、裏面に於ては開拓使官有物拂下げ問題と云ふ前古未曾有の大事件が突發して廟堂の風雲急を告げてゐた。

明治二年北海道開拓を目的とする開拓使を置かれ、長官は鍋島直正、東久世通禧と代を重ねたが、三年に至り薩藩の利権者黒田清隆を次官に据ゑて以來、實權は黒田に移り、十五年一月西郷從道に代る迄はこれが續いた。そして明治五年から十四年まで十ヶ年計畫一千萬圓の開拓費を注ぎ込んで様々な施設を試みた次第であつたが、豫定の期限が早くも終つたので、政府は十四年限りで開拓使を廢止しようとして云ふ腹をきめてゐた。ところが開拓使書記官であつた安田・折田・鈴木の三名が、大阪在住の薩摩の巨商五代友厚と結託して開拓使官有物一切を僅々三十萬圓で而も無利息三十ヶ年賦と云ふ蟲のよい條件で拂下げようとたくらみ、その事を中央政府に願ひ出た。薩摩の大立物であつた黒田清隆は己の勢力を以て臺閣に連る諸參議を壓伏し、五代友厚と結託してこの非を遂げんとしたので、かねてより薩長出身の官僚が政權を恣にして自派の勢力を張るに汲々たるを憤激してゐた大藏卿大隈重信

は、その機乗ずべしとなし、諸新聞を利用して盛んに開拓使官有物拂下げの不法を論難せしめ、薩閣官僚の徒をしてかかる非違をなさしめざるためには、國會を急設して民意を暢達する途を開かねばならぬと云ふことを福澤諭吉門下をして呼號せしめ、輿論を味方として薩長の勢力を根本から覆へさうとした。

初め維新政府が結成された折には、薩長土肥の兵力がその後楯となつたことは云ふまでもないが、それらの中では薩長が主動力であつた。然し薩長は孰れかと云へば薩の西郷・大久保の勢力が、長の本戸の上であり、明治十年前後までは薩州の全盛時代であつた。が、西郷・大久保・木戸等の一流の政治家が歿してからは、政府の實權は第二流の長州政治家の手に移り、參議兼内務卿伊藤博文が次第に頭角を現はして來た。さて大久保歿後の内閣は三條實美の太政大臣、岩倉具視の右大臣は元の儘であつた。そして參議中大隈重信は大藏卿、伊藤博文は内務卿、大木喬任は司法卿、井上馨は外務卿、山縣有朋は陸軍卿、黒田清隆は開拓長官、西郷從道は文部卿、川村純義は海軍卿、山田顯義は工部卿と云ふ顔觸れで、閣員のうち薩人は黒田・西郷・川村の三人、長人は伊藤・山縣・井上・山田の四人、肥人は大隈・大木の二人で、實權は長派の伊藤・山縣の手に握られてゐた。

この頃藩閥政府の敵である民間黨は猛烈な迫害を受けて悉く滅びてしまつたところへ、維新の功臣中、野に下つた板垣退助が疾風迅雷的に民權論を唱へ、立憲政體の實行、國會の開設を政府に迫り出

したので、天下の物情騒然、政府は非常な窮地に陥ることとなつた。

自由主義の氣勢が日増に強大になるのを見て取つた大隈は、藩閥政府の政弊を根絶して明るい政治を行ふには、速かに國會を開き、國民の代表者を立法の事に關與せしめ、惡をなす政府を撃射しなければならぬと考へ、明治十五年の末に議員を選擧して十六年の初めに國會を開くべしと云ふことを主張した。爲に伊藤博文との間に大衝突を惹き起し、大隈は政府部内に於ける獅子身中の蟲なりと目せられるに至つた。

快々として樂しまなかつた大隈は、時の政府に失敗あれよかしと隙をねらつてるところへ降つて湧いたやうな開拓使事件である。國民の監視が届かぬ專制政治であればこそ斯る不正が行はれるのである。早く國會を開設して藩閥政府を打倒せよと云ふことを大隈は聲を高くして叫び出したので、薩長出身の諸參議は政府の敵なりと云ふことで大隈を手いたく攻撃した。併し政府攻撃の輿論は烈々として燃えさかり、有栖川宮すらも拂下げの不法を憤られて辭職を申出でられるやうな有様となつたので、薩長の諸參議も之に尻込みをした。そして天皇東北北海道御巡幸を機として徐に策を建て直さうとした處へ、全國自由主義の同志が板垣を擁して帝都に集り、國民軍は結束して大隈を援け、政府打倒の大旗を翻した。ために滿都の人心恟々として鼎の沸くが如く、政府に於ても事態を収めることが出来なくなり、百計盡きた三條太政大臣は難を避けて東京を逃げ出してしまつた。その大騒動の眞最

中即ち十月十一日には北地の御巡幸を終らせられた明治天皇が、御機嫌麗はしく御還幸になる御豫定であつたので、あわてふためいた工部卿山田顯義が早馬で陛下を途上に迎へ奉り、ひそかに事態の重大なることを伏奏して、御還幸と同時に御前會議開催の儀を願ひ出た。長途の旅の御疲れをも御厭ひなく、陛下には山田の申出を御允許に相成り、御歸京のその夜、徹宵御前會議を御開きになられて、先づ開拓使官物拂下げを止め、「將に明治二十三年を期として議員を召し、國會を開きて以て朕が心を成さんとす。」と云ふ勅書を天下に下し給ふと同時に大隈を解職し、征韓論以來ためしなき廟堂の大紛擾を一舉にして解決し給うた。

之を要するに開拓使拂下げ事件は我國の憲法發布國會開設を促進せしむるに與つて力があつたわけであるが、此の大事件を惹き起す導火線となつた開拓書記官安田貞則が、私が大島家の次男だと聞いて養子縁組を申出た事があつたから面白いではないか。當時の開拓使の高官共は、農學校卒業生中の英才を物色して娘の嫁にしようとしたものであつた。佐藤と主席を争つてゐた荒川重秀の如きはその一例で、彼は望まれて開拓使書記官兼札幌農學校々長であつた調所廣丈の婿となつた。

然しかかる政略結婚は必ずしも幸福なものではなかつた。在學當時の秀才荒川が、川上貞奴の一座に加はつて各地を巡業して歩いたり、晩年京大法學部の學生となつて孫のやうな者達と机を並べてみたり、家庭愛に恵まれなかつた彼は随分數奇な途をたどり續けて一生を終つてしまつた。若し私が安

田書記官の聲になつてゐたらそんな生涯を送ることになつてゐたであらうか。安田・鈴木の兩書記官は開拓使でも評判の能吏で、黒田長官の覚えがめでたかつた。随つて拂下げ事件を起した張本人ではあつたが、黒田長官のために芝居を打つたのに過ぎなかつたので、兩人共處罰は受けず、安田は茨城縣知事に轉じ、鈴木は農商務省へ轉任を命ぜられただけでした。吉凶は糾なへる繩の如しとはよくも云つたもの哉と、往時を回想して感慨無量である。

クラーク記念會堂

第二期生一同が錦を着て夢に見る家郷を久々で訪づれてゐるその留守中に、私は札幌にあつて一生懸命に禮拜の家を探し求めてゐた。苦心の結果二百七十圓で手に入れたのは、南二條西六丁目に位置する地所と家屋とであつた。その家は間口五間、奥行六間の木造板葺屋根の二階家の一半で、建坪の倍の廣さの庭があつた。これは貸長屋として建てられたもので、臺所と圍爐裏とが非常に大きな部分を占めてゐた。階下は廣くて教會には逃へ向きであつたが、二階は不要であつたので、これには下宿人を置いて教會費を助けることとした。工學的素養のあつた藤田九三郎は先づ第一に男子用の頑丈な

腰掛六脚を設計して注文してくれた。又婦人のためには講壇の前の疊敷きを提供することにした。講壇は最も簡単な壇と卓子とから成つてゐたが、在學中二期生達の愛したメリケン粉櫛の講壇に比すれば、その莊嚴なること月とすつほん程の相違があつた。出席者が以上の座席に溢れた時には、床に切つてある圍爐裏に板をかぶせ、その上に毛布を敷いて約十人分の座席を作る用意が出来てゐた。この教會の収容力は五十人を限度としてあつたので、冬になつてストーブが講壇の前にのさばるやうになると、はみ出した幾人かは窓や壁にもたれて立つてゐなければならなかつた。

なほ一つ特筆大書すべきことは、この教會にはデニング氏より寄贈されたオルガンが備へられたことであつた。外部から参加した會友の中に奏樂者があつたので、そのオルガンによつて五十人の會衆が、建物をゆり動かすやうな響聲を張り上げて讚美歌を合唱することが出来た。日曜日の講壇と水曜日の祈禱會とは、第一期生と第二期生とがかたみ代りに受持つたが、聖公會の信徒も之に合流したので、會員の數が俄に増加して教勢頓に振ひ、宿題であつた獨立問題も熾烈な烽火を擧げ、遂に左の理由の下にささやかなこの教會は獨立を宣言することとなつた。

- 一、同窓の信徒其宗教上の意見殆ど相同じきに拘らず分離するの不可なること。
- 二、札幌の如き狹隘なる市街に二派の集會所を設けて競争するの愚策なること。
- 三、嚴格なる信仰箇條と煩雜なる禮拜儀式の束縛を厭ひたること。

四、外國人の扶助を借らずして我邦に福音を傳播するは我國人の義務なりと知りたること。

斯くして新たに生れた札幌獨立教會の組織は極めて簡單なものであつた。教會は五人の委員會によりて管理され、その中の一人が會計係であつた。普通の事務は悉くこの委員會によつて處理されたが、會員の入退會の如き重大事には全會員が召集され、その三分の二の同意を得て初めて決定されることになつてゐた。教會は會員各自に對して教會のため何事かをなす事を要求した。何人も怠惰であつてはならなかつたので、何も爲し能はぬ者はストーブの薪の番をしてもよいと云ふやうなことになつてゐた。日曜日は一週間中の最も楽しい日であつたので、兄弟達は朝早くから教會に押しかけた。そして夜の集會が終つて十時の鐘と共に一同が己が巢に退却するまで、會堂内に人聲の絶えることとは無かつた。

ところで、希望に充ちた青年達が學窓を出て乗り出した人生は、想像してゐたやうな、そんななまやさしいものではなかつた。凡ての事が欲したやうに又計畫したやうには動かなかつたし、各自の信仰も亦絶えず灼熱的ではあり得なかつた。かくて人心の弛緩が或る方面で認められ出したが、解決すべき當面の問題として四百弗の借財を如何にして支拂ふかと云ふ重大事が横はつてゐた。且つ又説教者は無報酬ではあつたが、教會の維持には少なからぬ經常費を必要とした。このやうな經濟的難局を如何にして打開せんかと十一月十五日にヨナタン・クロコダイル及び私の三人が相會して協議を重ね

たが、その日は解決の曙光をすら認め得ず、嘆息と不安とを以て散會した。

ところがその夜、私が寓居に歸るや否や、意外なものが私の歸來を待つてゐた。愛兒とも思ふ我等を残して遠く別れ去られたクラーク先生が、獨立教會創設の報を聞いて欣然米貨一百弗と云ふ大金を送り越されたではないか。『主は備へ給はん』である。悲觀する勿れである。この善きおとづれは忽ち兄弟達の間に擴まつて歡喜の渦をまき起し、凡ての者の胸に新たなる希望が泉の如く湧き出て來た。

十二月廿九日喜び勇んだ三十有餘人の兄弟姉妹達は相集つて楽しく主の降誕節をことほいだ。そして新玉の年立ちかへる正月元日、彼等は購ひ得たる新會堂に集つて新年を祝し、併せて獨立教會の出現を慶賀してゐたが、何たる悪魔の仕業ぞ、その席上へ、函館のメソヂスト教會から一封の書狀が投げ込まれた。嘗て何心なくメソヂスト教會に席を連ねた青年信徒達は、函館のメソヂスト教會にあてて脱會届を出して置いたので、これはその返事であらうと考へたその豫想はガラリとはづれ、獨立するやうな不屈な團體を支持するわけにはゆかぬから、かねて送付して置いた米貨金四百弗を即刻返金せよとの爆彈的動議を叩きつけて來たのであつた。これは貧乏書生の寄合世帯にとつては容易ならぬ事であつた。つまりその金によつてメソヂスト教會を建てるなら兎に角、獨立教會を建てることは以ての外である。そのやうな不都合な事は承引出來ないから金を返せ、と居直つて來たわけであつたが。

「我等は金錢の爲に信仰の自由と獨立とを失ふべきでない。直ぐ拂はう。クラーク先生の金があるではないか。教會の金庫は最後の一錢まで支出して我等の負債を片付けよう。」「然り！ 然り！ 贊成！ 贊成！ 拂はう。」と憤怒に燃えた一同が唱和して立ち上つた。そして取敢へず百弗を電信爲替で送金し、その年の十二月廿八日までに全部の負債を償還してしまつた。

このやうにして金錢上の連鎖が斷たれたのを機會に、メソヂスト教會はヨナタン等の脱會を承認した。斯くて札幌の信徒達は俯仰天地に愧ぢざる獨立獨歩の信仰を保つ日本唯一の教徒團となつて、北海の一隅に福音を傳へるやうになつたが、その後教會は順調に發達を遂げ、會友一同が私を牧師に押し立てて勇ましく傳道界に乗り出した。

明治十七年前後には、會員は漸く増加して假會堂では動きが取れないやうになつたので、一般に寄附金を募つて、南三條西六丁目一番地に二百七十坪の土地を買入れ、明治十八年五月ヒューの設計になる會堂の建設に着手した。同年七月工費一千三百八十五圓を費して新會堂は竣工し、八月八日にはめでたく献堂式を舉行したが、この會堂は引續き大正十一年五月迄三十七年間使用された。同年八月廿八日札幌の心臓とも云ふべき大通西七丁目に縁りも深い黒田開拓長官の像と相對して建てられた壯麗なクラーク記念會堂の献堂式が行はれたが、これこそは櫛風沐雨苦節を守り通した札幌獨立教會が榮ある新衣に包まれたその姿であつた。

顧みれば五十有餘年の昔、クラーク先生によつて播かれた福音の種子は、純真なりし青年學徒の心をうるほしてすく／＼と生長發達し、我國文化史上に何人も否定すべからざる大なる貢獻をなさしめたのである。クラーク記念會堂が地にその姿を失はぬ限り、偉人クラーク先生の魂は生きて北の都に學ぶ凡ての者を照さすではおかぬであらう。

母校の危機

明治十五年二月豫定の如く開拓使は廢止されて、札幌・函館・根室の三縣を置かれることになつたので、伊藤一隆は札幌縣御用係を申付けられ、平野彌十郎は工部省雇を申付けられた。札幌農學校は農商務省の所轄となり、同省農務局に屬することとなつたので、私は農商務省御用係を命ぜられた。

明治十五年七月第三回卒業生十八名を校門から送り出したが、規模が縮小された新設三縣では、此のやうに多數の新學士を採用する力が無かつたので、彼等の半數は内地の府縣に職を求むることを餘儀なくされ、卒業と同時に思ひ思ひに離散してしまつた。これが數に於てまさつてゐた第三期生の前途が恵まれなかつた大きな原因であつたかも知れない。

明治十六年二月、札幌農學校は農商務省内に設けられ北海道管理局の管轄となり、同年三月私は左の辭令を受けた。

御用係 大島正健

任札幌農學校助教

月俸四拾圓給與候事

明治十六年三月廿六日

農商務省

これと同時に卒業後、東京の駒場農學校で獸醫學を研究してゐた第二期生の南鷹次郎も助教に任命せられ、間もなく農園の副監督を兼ねることとなり、東京理科大学に於て植物學を専攻してゐたフランスス官部金吾も、この七月歸り來たつて母校の助教となつた。

この頃、我等の仲間であつた佐藤昌介と荒川重秀とは私費で米國へ留學中であつた。また立役者であつたヨタナン内村鑑三は十五年十二月に官途を辭して上京し、津田仙の學農社に於て教鞭をとる身となつてゐたし、チャールス廣井勇は工部省技手を拜命して十五年二月に札幌を去り、パウロ太田稻造も亦十六年八月に御用係を辭して東京帝國大學へ遊學の途に上つてゐた。その他第一期生及び第二期生の多くが職務の都合で各地に離散したので、本據であつた札幌は段々さみしくなり、賑かであつた山鼻の共同住宅すらも、追々と愛の巢を構へた學士連が各自獨立した一戸を持つやうになつたので、門前雀羅を張るやうな始末になつて來た。

明治十六年には札幌農學校では全然卒業生を出さなかつた。これは明治十二年度に於て、在學官費生總數四十八名に達して定員五十名を突破せんとする勢になつたので、同年豫備科よりの進級入學を拒絶し、同時に外部よりの生徒募集を中止した結果であつた。

明治十九年一月二十六日、北海道管理事務局が廢せられ、三縣廳を併合した北海道廳が札幌に置かれることになつたので、札幌農學校はその儘北海道廳へ引繼がれ、私共教職員は北海道長官の指揮命令を受けねばならぬ身となつた。

初代の長官として赴任して來たのは岩村道俊であつたが、移管後間もなく私人企業の競争を避けしむると云ふ意味で、農學校所屬農園を壓縮し、耕地約六十七町歩、未開地約六百四十町歩、牛七十七頭、豚二十九頭、馬六頭を道廳に引渡し、學校には僅かに耕地四十一町歩、未開地二十五町歩、牛二十頭、耕馬十頭、豚十一頭を與へて、辛うじてその目的を遂行し得る程度に農園の事業を壓迫した。札幌農學校農園が開園以來、北海道農業の指導開發のために貢献したことは至大であつたにも拘らず、無知なる官僚輩が俄かにその縮小を策し、經濟上自立可能の地位に到達してゐたものを、根本から覆してその基礎を危うくしたことは、當時農園長であつたブルックス教授の憤激を買つたのみならず、心あるものをして農學校の前途に暗雲低迷することを思はしめた。ところがその杞憂が果然事實

となつて現はれた。北海道廳新設に就いて北海道の政情を視察に渡道した内閣書記官金子堅太郎の復命書中に、札幌農學校の教授法は餘りに學理に馳せて實地に疎であるから、之を存置する必要は無いと云ふやうな意見があつた。この結果中央に於てその存廢問題が起り、岩村長官はこの容易ならぬ問題を解決せねばならぬ責任を負はされることとなつた。恰もよし、この年八月長老佐藤昌介が歐米留學より歸朝し、岩村長官に面接して札幌農學校の使命と過去に於ける偉大なる功績とを詳述して論辯大いにつとめ、廢校なきは以ての外のことであつて、その維持發達を計ることこそ時勢の進運に應ずる適策であることを進言した。且つ又歐米諸國の情勢を目撃して新知識を充分に吸収して來た彼は、工學科と簡易農學科の併置を力説して詳細な復命書を提出したので、長官の意大いに動き、その結果當路の方針は農學校存續に決したばかりでなく、翌廿年には工學科並びに農藝傳習科の増設を見、道廳は本格的に札幌農學校を守り育てるやうになつた。

これより先、宮部金吾は植物學研究のため米國ハーヴァド大學に留學を命ぜられたが、時を同じうしてジョンK伊藤も水産業調査のため米國に出張仰せつけられた。或日フランスが大學の校庭を歩んでゐたら、遠方から「宮金！ 宮金！」と呼びかける者があつた。驚いて近よつて見たらそれはジョンK伊藤であつたと云ふやうな挿話を産んだのもこの頃のことである。

無精者のチャールス廣井が、室の片隅に古チョッキを擴げて用便を足し、闇にまぎれて窓外遙かに

力の限り投げ飛ばして知らぬ顔をしてゐたら、翌朝人の好きさうな親爺がコツ／＼とチャールスの室をノックし、今朝庭掃除をしてゐたら見馴れぬチョッキが落ちてゐた。さうもこれは貴方が着用してゐたものに相違ないと思つたから届けに來たと云はれてチャールスは颯と顔を赫らめた。禮を云つて親爺を歸すなりチョッキを改めて見たが何ともない。ハテナと思つて室の隅に眼をやつて見たら、一物は儼然として床の上にとぐろを捲いてゐた。チョッキを擴げたのはよかつたが、その袖の孔へやつてしまつたので、チョッキに包まれた筈の現物が悠然と控へてゐたのだとわかつて、さすがのチャールスも頭をかいて恐縮したと云ふ留學奇談。それもこの頃のことであつたと語り傳へられてゐる。

明治十九年十二月廿八日札幌農學校官制が制定せられて、佐藤昌介が教授に任ぜられたが、翌年三月北海道理事官佐藤秀顯が校長事務取扱を免ぜられるや佐藤昌介が校長の職務を代理するやうになつた。

さて右の官制に於ては奏任教授の定員僅かに二名と限定されてあつたが、校運日に隆昌に赴くにつれて、これでは手も足も出ないと云ふやうな有様になつた。そこで北海道長官より教授増員の件を總理大臣宛稟申してその許可を得、明治廿二年一月十九日勅令第四號を以て教授の定員を八名と改められた。その結果同年九月十一日附で私は母校の教授に任ぜられ、奏任官五等に叙し中級俸を下賜された。

この年三月北海道三等技師橋口文藏が北海道理事官兼札幌農學校々長に任ぜられたが、廿四年八月橋口は兼官を解かれて佐藤昌介が校長心得を命ぜられ、廿二年に歸朝したフランシス宮部・チャールス廣井並びにこの年三月に歸朝して教授に任ぜられた太田と共に私は佐藤を扶けて校務に鞅掌することとなつた。

獨立教會と新島襄先生

明治十五年十二月廿八日を以て函館メソヂスト教會に對する負債の全額を支拂ひ終つた我等の獨立教會は、爾來眞に獨立獨歩、俯仰天地に愧ぢざる自主の精神に活きて發展の途をたぎつて行つたが、會員中の中堅であつた第一期及び第二期の卒業生中、次第に札幌を去る者が出來たり、業務繁忙のため、心ならずも教會に遠ざかる者も現はれ、交互に教壇を受持つと云ふことが、不可能となつて來たので、衆望の歸する所、私が母校に教鞭をとりつつ、牧師の職務に従事することとなつた。

明治十八年南三條西六丁目に堂々たる教會堂が出現した頃には教勢頓に振ひ、信徒の數も著しく増加する傾向があつたので、臨時總會の決議に基づき按手禮を受けてゐない平信徒の私が堂々と洗禮・

晚餐の式を掌ることとして教務の擴張に努めてゐた。正式に云へば牧師の資格を得てゐない者が聖職を敢行するのであるから、違法であつたことは云ふまでもない。果然このことは基督教會の大問題となり、各方面から非常な反對と非難を受けるやうになつたので、明治廿年の夏期を札幌に過して宿痾を養うてゐられた新島襄先生が、いたく之を憂へ、何れの教會教派にも所屬せざる獨立教會の牧師として按手禮を授けることに骨を折るから、此際上京して牧師の資格を得るやうにと云ふことを懇々と説得された。

孰れの教派にも屬さないと云ふことであれば、それを快諾しようではないか、と云ふ教會員の意向であつたので、明治廿一年一月十二日、今度はミッシヨナリー・モンクが愈々正式の牧師になつて來ると云ふ喜びに充たされた教友達の歡呼の聲に送られて、私は札幌驛を出發上京の途に就いた。そして麴町一番町の一致教會（今の富士見町教會の前身）で、植村正久、井深梶之助、小崎弘道等各派を代表する者が列席立會の上で按手禮を受け、以て正式に牧師たる資格を得た。その際、若し私が將來異端を唱へたり、悶着を惹き起す種を播いた場合には、其責任はこの教派が負ふかと云ふ問題が出たが、それは新島先生によつて代表される組合教會が札幌獨立教會と最も縁故が深いから、組合教會が責任を負うたら宜しからうと云ふ事に申合はせが成立した。後年このことが誤り傳へられて、私がベテンにかけられて組合教會の牧師にさせられたとか、新島先生が札幌獨立教會を自派に抱き込む工作

をしたとか云ふ噂を立てた人もあつたやうであるが、それは根も葉も無いことで、事實において私は各派立會の下で札幌獨立教會の正式牧師たることを承認されて來たのであつて、各派を納得させて斯く事を運ばせるまでには、新島先生の御骨折が與つて力あつたことを忘れることは出來ないのである。

新島襄先生が札幌獨立教會の主義主張に賛して大いに之を後援されたことは、馬場種太郎氏を簡拔して傳道師に推舉せらるるに就いて送り來された次の文面が明かに之を物語つてゐる。

前略

滯京中幸に馬場氏にも面會致し充分の談話を遂不申候得共先大體の所相含ませ置候間定て不都合はあるまじと存候。兼而申上候通同氏は未だ牧會の事には老練ならず、又學力もあると申す人には無之只熱心道を求むるの人に有之候へばその邊の所已に御承知も有之候間何卒同人の不足の分を補ひ活して用る被下候様又自然過失有之候節は御忠告被下貴兄の手足となりて相働候様御薰陶被下度候。且數月間御試の上萬一御不満足ならば無御遠慮その事を御知らせ被下度若し久しく其地に止まらるべきものと御認め被下候は、貴會に轉會して貴會員となり、地方に傳道するなり又空知邊に參り牧師となるなり御地の便宜次第に御處分有之度候。何分同氏には北海道の人民ともなり度精神の由

なれば其智力なり學力なり信仰なり益發達致候様御導引被下度候。

兼て御相談申上候所の空知は近況如何。早々の教會を立て札幌と同主義教會なりと世間に御公告ありては如何。札幌教會は如何なる手段にて御設會ありしや簡易なる手段にて苦しからずと存じ候。然し此事は貴兄のオルデネーションの出來候上の事に被成方が上策かと愚考仕候。何分此十二月の休暇には斷然右オルデネーション御專行之程奉切望候。他より贊助するものなきなれば貴兄と貴會より二三の代人を出張せしめ一教會を設置するに足ると御認めあらば御設置ありては如何かと存候。宣教師か又は牧師にて之を贊助するものあらば尙更重々の事と存候。グリーン氏位に臨場を御依頼あるも宜しきかと存候。然し速かに江別・當別・岩見澤邊に御着手あるは小生の尤も切望する所に候。願くは石狩川平原に獨立の教會を御設定ありて他年北海道の依つて立つべき基礎となし依つて進むべき精神となし賜はん事を。此自由主義の教會を立つるには昔時より爲に血を流すもの多く所謂血を以て買はれたる自由なれば、差少の理一時の方便の爲に之を安賣りし賜ふ勿れ。生は此自由を以て我が子孫迄も永くクレデシーと爲し人民の元氣を養成せしめんと焦慮仕居候。貴兄願くは生の老婆心を御了察あり爲に御工夫あり賜へ。願くは貴兄の全身全力を主に呈し、主の御國の爲に御働きあれ。書萬一を竭さず。頓首。

明治二十年九月

襄

大島 正健賢兄

其後は打絶御無音申上候貴家如何御消光被成候や。秋冷催來御地は定て秋色を帶び候事と奉遙察候。此度は馬場君にも幸に好配偶を得られ小生共も大いに喜び居申候。何卒同氏將來充分御引立御地に於て相應の働相立様精々切望仕居候。又同氏に相托し當地方の模様申置候間定めて海山御聞取被下候事と存候。伊藤家の御老人様並びに貴家御一統には御變り無之候や。滿ボウ先生（註 正滿のこと）には相不替奇拔の御言行候事と毎々話居候。

御地傳道の事乍遠方心配仕居候。何卒御地方に於て充分獨立平等の教會を振はしめ他日北海の元氣精神になし賜はん事切望の至に不堪候。先は御左右御伺申上候。早々敬具。

明治廿二年九月十四日

新しま 襄

大島 正健賢兄

クラーク先生の精神に燃える札幌獨立教會は、本邦基督教會の偉人であり先覺者である新島襄先生の心からなる支持を得て教勢大いに振ひ、明治廿一、廿二兩年度には會員激増、毎日曜の禮拜には出

席者百四五十名を算すると云ふやうな盛況を呈するやうになつた上に市來知、月形、當別等へも遠征傳道すると云ふすばらしい發展振りを示すやうになつたが、明治廿三年には國粹主義による反動が起つて信者が激減したところへ、一致教會、メソヂスト教會及び聖公會が市内に教會を建てて相對峙したので、クラーク先生の傳統を守る者共は大なる苦杯を喫せねばならぬこととなつた。その上に又獨立教會の母體なる札幌農學校が、出身者の多くが北海道に於て事業に従事せずして内地府縣に赴くと、不生産的の人物を出すこと、基督教的學校であつて、學生々徒は多く之に感化せられ、爲に國家觀念が薄弱であると云ふやうな俗論によつてその廢止を叫ばれると云ふやうな状態となつて來たので、世は永へに春ならじと云ふ感を深くするやうになつた。

札幌を辭す

ヨナタン内村鑑三がその舊友岩崎行親に書き送つたやうに、私共をはぐくみ育ててくれた北海の樂園は跡方もなく消え失せる時期が迫つて來た。俗人の手にゆだねられた北海道は、青年の心を潔め其志を高からしむる能力を失つて來た。さればとて歸去來の辭を賦して閑雲野鶴を友とする年でもな

札幌を辭す

二七九

し、基督信徒として我が志をなさんが爲には如何なる途を選ばんかと獨り思ひわづらつてゐたところへ、敬慕する新島先生の遺業を全うせんが爲に、先生が心血を注がれた京都同志社を守り育てよとの命を受けた。骨を北山に埋めるつもりではあつたが、形勢日に非なるを悟つた私は、その招きを神の命であると信じて快諾した。そして涙を垂れて袖にすがる數へ子等と札幌驛頭に袂を分ち、十有八星霜を迎送したなつかしの山河に別れを告げて、思ひもまうけなかつた洛陽へと旅立つた。時は明治廿六年十月、日清間の風雲漸く急を告げんとする頃のことであつた。

辭札幌

講道說文窮北郷 經過十有八星霜

無端今日試南下 豐水圓山別恨長

北陲秋色思依々 枯杖辭家赴帝畿

知否阿爺無限感 群兒緇袖問我歸

北遊十有八星霜 又整行裝向洛陽

回首山河皆舊識 却疑蝦島是家鄉

追悼新島先生

秋風北地接溫容 爲我嘗開星斗胸

偉業遺蹤人已逝 斷腸相國寺邊鐘

クラーク先生ごその弟子達 終

あとがき

本書の著者、大島正健先生は前版上梓の翌年、八十歳の生涯を了られた。又先生が序文に記されたクラーク博士の胸像は太平洋戦争の犠牲となり、鑄潰されて今墓石のみをさめて居る。その十年間の時の移り變りには、クラーク博士を慕うて同じ學園に學んだ後輩としての感慨は深いものがある。

此書に記された後の大島正健先生の歩まれた道については、札幌農學校同窓會報に寄せられた宮部金吾博士の小傳があるから、以下に本書を重複しないやう抄出しておく。

(前略)明治二十六年十月札幌農學校を辭し、京都同志社に轉じ普通學校教授に任ぜらる。居る事三年にして二十九年九月私立奈良中學校々長の位置に就き、同校廢校に伴ひ三十四年三月山梨縣立甲府中學校長に任ぜらる。在職十三年、教育の效果大いに擧り、幾多の英才人格者を輩出す。此間勳六等瑞寶章を授けられ従六位に叙せらる。

大正三年九月願に依りて本職を免ぜられ、同年十月文部省の懇請に依り當時紛糾を極めたる宮崎縣立宮崎中學校長の職に就き、能くその任を全うし、同五年一月再び願により本職を辭す。

同年六月京城府私立セブランス醫學校教授に任ぜらる。當時朝鮮の民心穩ならず、又政府と外人との間に意志の疎通を缺くこと多く、其間に立ちて専ら調和の勞を取る。大正九年三月同校を辭任す。

同年同月私立養正高等普通學校教授を囑託せられ、同十二年十二月辭任す。

昭和三年三月文學博士の學位を授與さる。右は大正八年京都帝國大學文學部へ提出したる「支那古韻史」と題する論文、教授會を通過せるによる。時に歳七十歳。

昭和十年六月輕微なる腦溢血の爲め左半身不隨となり、爾後一進一退なりしが、同十二年四月腦軟化症を併發し意識を失ふも榮養攝取の力は毫も衰へず、約一年間病床の人となりしに十三年三月上旬尿毒性を發し、病勢急に革まり篤き看護の甲斐もなく、遂に三月十一日天父の御召を蒙り平安に瞑目す。享年八十歳。(中略)

君は夙に音韻學に興味を感じ獨學遂に斯界の重鎮となるに至りぬ。其源を尋ぬるに札幌農學校在職中東北出身學生の發音不良にして英語教育に支障多きを體驗し「北人假名遣」なる小著を公にし、以て言語の矯正に努めたるに始まる。尙ほ札幌在任中「字音假名遣便法」なる著あり、明治二十七年京都時代に於て「國語假名遣便法」を公にす。

君は又「古事記」「萬葉集」等に支那古代の發音の保存されあるに著眼し、多年研究を續け、遂に明治三十一年奈良在任時代に「支那古韻考」を著す。尙ほ同時代に「漢字と假名」及「音韻漫錄」を公にす。

君は甲府在任十二年の間に於ても尙ほ音韻學に關する研究を繼續し「韻鏡音韻考」・「懇切要略」・「改訂韻鏡」・「韻鏡三論」・「漢字聲符考」・「假名遣便法」・「國語の組織」等の著あり。

京城在任中は専心支那古韻の研究に没頭し、遂に大正八年「支那古韻史」を完成し、之を京都帝大文學部に提出して文學博士の學位を授與せらる。昭和四年之を印刷に付して公にせり。蓋し音韻に關する近代の名著なれども頗る難解にして、其眞價は後世の批判を待つて始めて發揮さるるに至らんか。

東京隱退中にも二三の著あり。即ち「韻鏡と唐韻音韻」・「韻鏡新解」・「國語の語根と其分類」及「漢音吳音の研究」等之なり。

妻千代子との間に六男四女あり、夫人は大正十一年十月逝去せらる。長男理學博士正滿氏は動物學を専攻し、特に魚學に通達す。次男讓次氏は外國語學校の支那語科出身、三男隣三氏は關西學院出身にして米國にて寫眞術を研究せらる。長女綾子氏は舊臺南庶民組合理事長櫻井齊氏に、次女百合子氏は野尻抱影氏に、四女佐保子氏は梅謙次郎氏四男松本光氏にそれぞれ嫁せられたり。其他の三男一女は皆夭折せらる。

君は學生時代より勝氣にて負くるを嫌ひ、又根氣甚だ強く、支那古韻の研究を遂に成就して不朽の名著を後世に残されたるが如き、以て其一斑を知るに足るべし。又記憶力の強かりしことは、在校中クラーク先生より教はりし讚美歌、或はイングリッシュ・デクラメーション(英語雄辯法)にて習ひしブルータスやアントニーの演説を老年に至るまで能く暗誦し、之を壇上より繰返して青年等を驚かせし事多きに徴しても明かなり。又學生時代より漢詩を克くし佳作極めて多し。

君は性無慾恬淡、萬事無頓着にて昔の哲人の行爲の如き多くの失策を演ぜられき。

趣味としては讀書を以て第一とし、勝負事にも深き興味を持ち、將棋は二段の技倆を有し、又相撲にも精通し、札幌在住の節は邸内に土俵を築き學生等を集め盛んに競技せしめられき。尙ほ又意外にも軍鶏を愛育して闘闘的に仕立つることを楽しみさせられき。之等は幼時故郷に在住中に得られたる趣味なりしが如し。

内村鑑三君死去の後は、柏木の團體に其擧を一にし、聖日の集會は勿論、其他特別の集會にも必ず出席し、團員の信仰の奨勵を怠らざりし。

晩年十六年間は正満君の家族と共に暮らされ、多くの孫達に取巻かれ、特に正満夫人の孝養の下に、最も楽しく其日を過され、且つ昭和十年以來長き病床に在りても、常に手篤き看護を受けられつゝ、最も聖く尊き一生を安らかに終らる。

左に遺詠を録す。

大正十四年元旦

黒髮童顏五尺身 勵精研學不降人

向天先謝神恩渥 六十七年年又親

昭和三年元旦

浮生益覺一身微 今是何能償昨非

好學偏欣餘日月 黑頭七十古來稀

昭和五年元旦

古稀添二又新陽 拙著漸成聊達望

欲入人生圓熟境 鬢邊初見數莖霜

八十歳最後詩

病蓐猶研學 偏憂歲月移

非無親進說 老拙奈人嗤

令閨を失はれたる時

杖留めてた、すむ秋の夕日影

あこふり返る獨り身の旅

(以上)

此の書の前版は日支事變がいよいよはげしくなる頃出たもので、版を重ねるに至らずして了つた。今北海道が日本人にクローズアップされて來、同時に札幌農學校が人々の間に問題にされるやうになつたとき、一個の貴重な歴史的文獻として此の書の出版にあづかり得ることは、出版者として、又同窓の後輩として欣ばしい事である。私は學窓を出て以來、三十年近く札幌農學校について小さな本を書き度いこの願ひを持ちつづけて居る。所蔵のこの書

の前版を罹災焼失したので、伊藤一隆氏の御令息にこの書の拜借を申し出たのが機縁となり、出版を引受くるに至った。

此の書がさきに出版された時、東洋經濟新報主筆石橋湛山氏は、甲府中學校で先生から受けた感銘を新にしてその讀後感を寄せて、「自分は自由主義と云ふものを大島先生から學んだ」と云ひ「自分は二代目の自由主義者である」と述べられたと云ふ。今時移つて變化した時代を想うて深い感懐にふけるものがある。

最後に本書の前の出版者、大橋貞雄氏が此の書の改訂出版につき快諾を與へられたことを記し感謝の意を表したい。
クラーク先生胸像再建の秋

長崎次郎



納本
1423

370
014

昭和二十三年十一月廿日初版印刷
昭和二十三年十一月廿五月初版發行

クラーク先生とその弟子達
定價 百六拾圓

著者 大島正健
東京都千代田區飯田町二ノ七

發行者 長崎次郎
長野市大門町南二二

印刷者 清水與助

發行所 株式會社 新敎出版社
東京都千代田區飯田町二丁目七番地
會員番號 A 一一九〇二二
振替番號 東京九九九一

柏與印刷合名會社 印刷及製本

370

370
CM

400

